富田林市遺跡調査会報告22

廿山南古墳

身体障害者療護施設「梅の里ホーム」建設に伴う緊急発掘調査報告

2003・3

富田林市遺跡調査会

富田林市遺跡調査会報告22　廿山南古墳　正誤表

項	行	誤	正
1	5	古墳北西方	古墳の北方
3	1	長さ5約	長さ約
10	図中	試掘壙	試掘坑
22	5	金属器	金製品

廿　山　南　古　墳

身体障害者療護施設「梅の里ホーム」建設に伴う緊急発掘調査報告

2003・3

富田林市遺跡調査会

墓壙床面検出状況　北東から

出土玉類・耳環

はじめに

古墳は市民の皆様にとって非常に興味のある遺跡の一つではないでしょうか。その理由の一つには、出土する豪華な副葬品の数々が現在でも輝きを放ち続けていることへの驚きがあるのではないかと思います。

しかしながら、被葬者が埋葬されたままの状態で残っている古墳というのは、ごく少数に過ぎません。大多数の古墳は、盗掘されてしまったり、発掘調査を受けぬまま開発によって破壊されたものなのです。

そのような状況の中で、廿山南古墳は運良く盗掘からも、開発からも逃れ、ひっそりと山中に眠り続けてきました。今回、療護施設の建設に伴い初めて発見された古墳なのです。

発掘調査を行ったところ、この古墳が古墳時代後期前半（約１５００年前）に造られた古墳であることが分かり、非常に良好な状態で埋葬施設が残存していることが確認されました。開発により遺跡が消滅してしまうことは残念なことですが、郷土の歴史にとって重要な資料を得ることができたと思います。

本書は、その廿山南古墳の発掘調査成果を収録したものです。埋蔵文化財へのご理解を深めていただくために活用していただければ幸いに思います。

最後になりましたが、調査に際しましては社会福祉法人いずみ野福祉会の皆様にご理解、ご協力を頂きました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。また地元住民の方々にも多大なご厚意を承りました。合わせて厚く御礼申し上げます。今後とも、本市文化財への一層のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成15年３月

富田林市遺跡調査会

理事長　清　水　冨　夫

例　　言

1．本書は『身体障害者療護施設「梅の里ホーム」』の建設にともない富田林市遺跡調査会が平成13年度に緊急発掘調査を行った廿山南古墳の調査報告である。

2．調査は横山成己が担当し、平成13年８月20日に着手し、平成15年３月31日に終了した。なお、現地調査は平成13年８月20日に着手し、同年11月９日に終了した。

3．現地調査にあたっては中辻亘、今西淳の協力を得た。また内業調査にあたっては粟田薫、金行美智子、楠木理恵、瀬戸直子、前野美智子、山本節子の協力を得た。

4．現地写真撮影は阿南辰秀、伊藤慎司、横山成己が、遺構実測は今西淳、横山成己が、遺物実測・拓本は金行美智子、横山成己が、遺物写真撮影は阿南辰秀、伊藤慎司が、製図は金行美智子、横山成己が行った。

5．本書の執筆および編集は横山成己が行った。

6．本書で使用した方位は国土座標第Ⅳ系に基づく座標北を表示し、標高は東京湾標準海面値（T.P.）で表示した。また、現地調査における土色と遺物の色調については小山・竹原編『新版標準土色　帳』を使用した。

7．本文付編科学的分析はパリノ・サーヴェイ株式会社、住友金属テクノロジー株式会社、ジオクロノロジー株式会社に分析、執筆を依頼した。

8．航空写真測量は株式会社ワールドに依頼した。

8．出土遺物の保存処理、レプリカ製作は有限会社工房エフエフに依頼した。

9．出土遺物および各種記録類は富田林市立埋蔵文化財センターで保管している。

10．調査の実施および本書の作成にあたっては、北野耕平氏（神戸商船大学名誉教授）、堀田啓一氏（高野山大学教授）、山本彰氏（大阪府立近つ飛鳥博物館）に有益なご助言、ご協力を頂きました。記してここに感謝の意を表します。

本 文 目 次

はじめに
例言
第Ⅰ章　位置と歴史的環境……1
第Ⅱ章　調査に至る経緯と経過……5
第Ⅲ章　古墳の構造……5
　1．墳丘……5
　2．埋葬施設……8
　3．遺物の副葬状況……11
第Ⅳ章　出土遺物……15
　1．第1次副葬遺物……15
　2．第2次副葬遺物……17
　3．第3次副葬遺物……19
　4．墓壙埋納祭祀遺物……19
　5．その他の遺物……21
第Ⅴ章　まとめ……21
出土土器観察表・管玉・棗玉計測表……23
付編　科学的分析
1．鉄製大刀付着木質部の同定……28
2．耳環の成分分析……29
3．赤色顔料の成分分析……31

挿 図 目 次

第1図　廿山南古墳周辺遺跡分布図……2
第2図　廿山南古墳墳丘測量図……4
第3図　墳丘断面図……6・7
第4図　廿山南古墳現況測量図……6・7
第5図　主体部平面図・断面図……10
第6図　第1次副葬玉類出土平面図……12
第7図　第2次副葬須恵器類出土平面図…14
第8図　第1次副葬遺物……16
第9図　第2次副葬遺物……18
第10図　第3次副葬遺物……20
第11図　墓壙埋納祭祀遺物……20
第12図　その他の遺物……21

図 版 目 次

図版1　廿山南古墳全景　上空から
図版2（上）廿山南古墳遠景　南西から
　（下）封土検出状況　南から
図版3（上）第2次副葬須恵器類　北東から
　（下）墓壙内埋土土層断面　南東から
図版4（上）主体部全景　北東から
　（下）主体部全景　南西から
図版5（上）廿山南古墳から廿山古墳を望む南から
　（下）墓壙床面検出状況　西から
図版6（上）墓壙床面出土土器類・鉄器類北から
　（下）墓壙床面出土玉類・鉄製大刀南から
図版7　第1次・2次副葬遺物・墓壙埋納祭祀遺物
図版8　第2次副葬遺物
図版9　第3次副葬遺物
図版10　第3次副葬遺物・墓壙埋納祭祀遺物・その他の遺物
図版11　第2次副葬の復元状況
図版12　出土玉類
図版13　出土鉄器類
図版14　鉄製大刀
図版15　鉄製大刀X線写真

第Ⅰ章　位置と歴史的環境（第１図・図版２上）

廿山南古墳は、富田林市域の西方を南北に走る羽曳野丘陵の南嶺、開析谷が複雑に入り組む地域の南東方向に突出する一支脈上、大阪府富田林市大字廿山20－８他に位置している。東側平地部との比高は35ｍを測り、古墳の北西方僅か120ｍの支脈の最高所には明治16年（1883年）に銅鏃が出土していることで著名である前方後円墳、廿山古墳が位置している（文献1）。

ここで石川西岸の古墳時代の概要を述べておこう。古墳時代前期には、羽曳野丘陵上に古墳が築かれるが、その分布は極めて希薄である。市域南部には前述した廿山古墳が、中部には方墳である宮林古墳（文献2）が、北部には前方後円墳である真名井古墳（文献3）、円墳である鍋塚古墳（文献4）が確認されているに過ぎない。これらの古墳は弥生時代中期に石川西岸に集落形態を整える喜志、中野、甲田南遺跡から引き続く集団の首長墓として認識されるが、段丘上の平地部に顕著な集落遺跡の存在は確認できていない。

古墳時代中期に至っても、その前半期には集落遺跡、墳墓が希薄であることは前段階と同様である。ただし、1990年の新家遺跡の調査において、包含層から黒斑を有する埴輪片が出土していることから見て、丘陵上ではなく段丘上に小型墳が埋没している可能性は十分にあり得ることである。中期後半には、段丘上に直径約40ｍと考えられる新家古墳、全長約45ｍの帆立貝式古墳である川西古墳が出現する。この内発掘調査の行われている川西古墳では、主墳の周囲に小型低方墳、埴輪棺が確認されており、古墳造営集団の内的な階層分化が看取できる（文献5）。

古墳時代後期に至ると、羽曳野丘陵上には所属時期の明確な古墳としては市域北部に６世紀後半に築造された茶臼山古墳（文献6）、平１号墳、２号墳（文献7）が、市域中部では同じく６世紀後半の美具久留御魂神社裏山第２号墳北方古墳（文献8）が確認されているに過ぎない。平地部には、中野遺跡内に大阪府教育委員会によって確認されている通称「新堂古墳」（文献9）や、川西古墳の周溝南側、遺跡名としては錦織遺跡で確認されている埴輪棺（文献10）など６世紀代の埴墓が確認されている。しかしながら、この時期は市域南部の石川東岸に田中古墳群、錦山古墳群などが、また東接する河南町の千早川と宇奈田川に挟まれた丘陵上には寛弘寺古墳群が大きく展開している。これらは横穴式石室を内部主体とし、群集形態をとるのに対し、石川西岸の羽曳野丘陵では平１・２号墳、美具久留御魂神社裏山第２号北方古墳はいずれも木棺直葬であり、丘陵上で現在古墳状隆起として認識されているものを含めても数基程度の群集形態しかとらないようである。両者の造墓形態の違いが何に起因しているかは今後も問題となるであろう。

古墳時代終末期に至ると、一転羽曳野丘陵での造墓活動は活発になる。市域北部では、７世紀前半のお亀石古墳（文献11）、７世紀後半の宮前山１号墳（文献12）が代表例として挙げられる。ともに横口式石槨を内部主体とする古墳である。市域中部では川原石積の横穴式石室である小金平古墳が発掘調査により確認されている。この様な石室構造は、宮前山４号墳でも確認されている（文献13）。この古墳は、出土遺物から７世紀中頃に築造され、７世紀後半、８世紀以降の２度の追葬が行われていることが確認されている（文献14）。その小金平古墳の北方約１㎞の毛人谷城跡遺跡では、東西に延びる尾根の南斜面に４基で構成される古墳群が確認されている（文献15）。この古墳群は墳丘背面を周溝により区画して築造されており、内部主体は木棺直葬である。この内１・２号墳は検出された鉄釘の位置から長さ約1.8ｍ、幅約0.4ｍの木棺であったと思われる。３号墳は２号墳の周溝北西外側に築かれた土壙墓であるが、川原石を棺台として利用している。川原石と検出された鉄釘の位置か

第１図　廿山南古墳周辺遺跡分布図（Ｓ＝1/10000）

ら長さ5約1.1m、幅約0.45mの木棺であったと思われる。この3基の木棺はいずれも南北方向を向いており、それぞれ棺の北側に7世紀中頃の須恵器蓋杯2個体を並べて副葬している。また市域南部、今回調査を行った廿山南古墳の南方0.5kmの丘陵上には南坪池古墳が、さらに南方0.5kmには堂ノ山古墳が立地している。南坪池古墳は一辺約15mの方墳と考えられており、内部主体は横穴式石室と考えられている（文献16）。埴が出土していることからも注目される古墳である。堂ノ山古墳は、一辺約10mの方墳と見られている。並列する2基の横穴式石室を内部主体としている。主体部は大きく破壊されているが、僅かに鉄釘、棺金具が出土している（文献17）。

以上、現在までに確認されている石川西岸の古墳の概要を記した。今後新規発見される可能性も充分あるが、ここで概略を述べてみよう。古墳時代前期には弥生時代から引き続く地域集団の首長墓が単独で羽曳野丘陵上に造営されるが、中期に至ると集落の階層構造の変化が見られ、平地部に墓域を移すようである。古墳時代後期前半は今ひとつ不明確であり、集落、墳墓とも明確な遺跡は確認されていない。後期後半には、再び少数ではあるが羽曳野丘陵上、また平地部にも墳墓が確認され、集落遺跡も数を増している。古墳時代終末期に至ると、羽曳野丘陵上での造墓活動が突如活発となる。この時期、市域北部には飛鳥期に新堂廃寺が創建されることや、また南部には少なくとも白鳳期には創建されると考えられる細井廃寺の存在から、中央政権に対する有力氏族の存在、またそれを可能にする生活基盤の安定が背景にあるものと思われる。

【文献】

1）北野耕平（1985）「第五章　古墳時代の富田林」，富田林市市史編纂委員会（編）『富田林市史』第1巻所収，富田林（大阪）

2）中辻亘・岡本武司・粟田薫（1985），富田林市教育委員会（編）『中野遺跡・宮林古墳発掘調査概要』（富田林市埋蔵文化財調査報告13）所収，富田林（大阪）

3）藤直幹・井上馨・北野耕平（1964）「第三章　真名井古墳」，大阪大学文学部国史研究室（編）『河内における古墳の調査』（大阪大学文学部国史研究室研究報告　第一冊）所収，京都

4）井藤徹（1966），大阪府教育委員会（編）『鴻塚古墳発掘調査概要』（大阪府文化財調査概要1966）所収，大阪

5）中辻亘・田川友美（1994），富田林市教育委員会（編）『甲田南遺跡』（富田林市埋蔵文化財調査報告25），富田林（大阪）

6）～8）前掲文献1

9）玉井功（1982），大阪府教育委員会（編）『中野遺跡発掘調査概要ー国道170号線歩道設置に伴う調査ー』，大阪

10）前掲文献5

11）横山成己（2002）「お亀石古墳」，富田林市教育委員会（編）『富田林市内遺跡群発掘調査報告書』（富田林市埋蔵文化財調査報告33），富田林（大阪）

12）前掲文献1

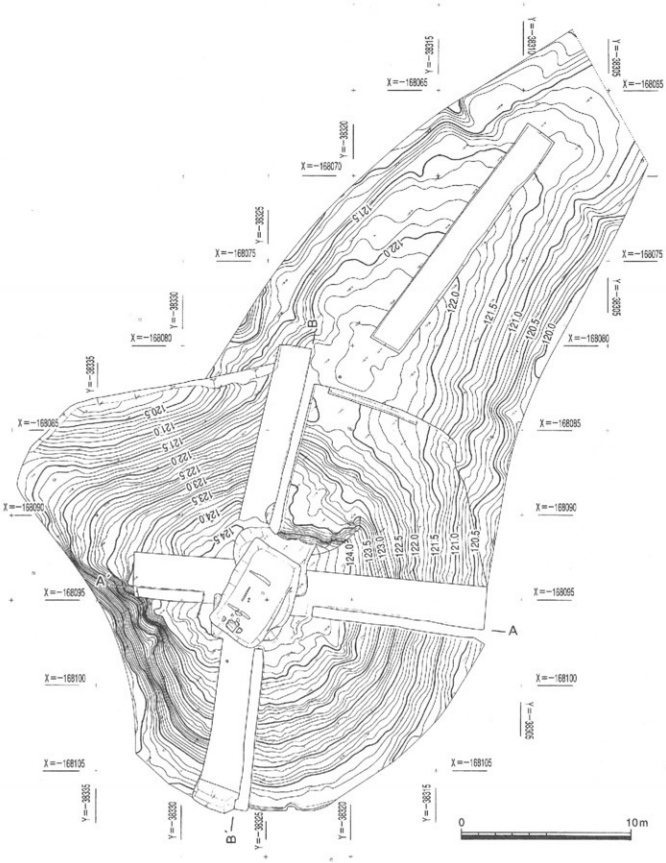
13）前掲文献1

14）富田林市教育委員会（1987）「小金平古墳現地説明会資料」，富田林（大阪）

15）富田林市教育委員会（1987）「埋蔵文化財発掘レポートーその19－毛人谷に眠る人々」，大阪府富田林市役所市長公室自治推進課（編）『とんだばやし広報』昭和62年5月号所収，富田林（大阪）

16）芝野圭之助（1986），大阪府教育委員会（編）『大阪府立錦織公園内古墳群発掘調査概要』，大阪

17）前掲文献16



第２図　廿山南古墳墳丘測量図

第Ⅱ章　調査に至る経緯と経過

今回の調査は、富田林市大字廿山20-8他の地において、身体障害者療護施設の建設が計画されたことを調査原因としている。この地の調査前の状況は竹林となっており、遺跡の包蔵地としては範囲指定されていなかった。しかしながら、開発範囲に古墳状隆起が認められたため、試掘調査を行うこととなった。

試掘調査は、2001年７月23日から同年８月３日の期間で行った。調査は、古墳状隆起に対しては幅２ｍで十字形にトレンチを設定し（第１調査区）、また隆起の北東側に伸びる丘陵の平坦部にも幅２ｍ、長さ15mのトレンチを設定（第２調査区）して行った。

調査の結果、第１調査区の頂上部において墓壙の掘り込みを確認するに至った。このことにより廿山南古墳が木棺直葬墓である可能性が極めて高いことが想定された。この墓壙内の排土は、遺物が混入している可能性があるため、土嚢詰めにして保管した。第２調査区では遺構・遺物の検出が見られなかったため、丘陵平坦部は調査対象から除外することとなった。

現地における本調査は、2001年８月20日から同年11月９日の期間で行った。墓壙内埋土は、試掘調査同様に細かな遺物の取り残しの可能性が考えられたため、現地調査と同時に３㎜メッシュの篩がけを行い遺物の回収に努めた。

第Ⅲ章　古墳の構造

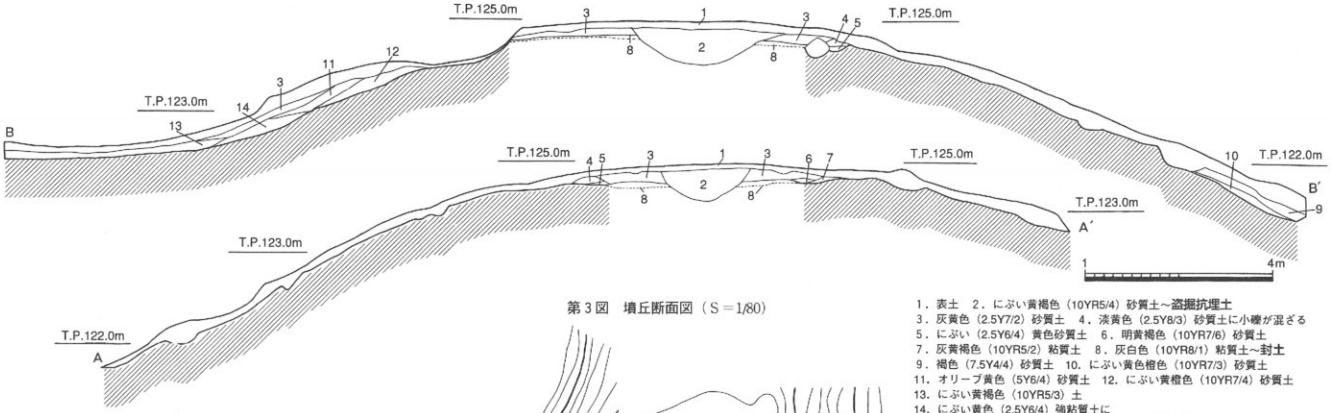
１．墳丘（第２図～第４図・図版１）

前述したように、調査地は竹林であったため、調査前に竹を伐採し、現況測量を行った（第４図）。地形は、墳丘北東側の丘陵平坦部から最高部で約2.8mの高さをもってほぼ円形に隆起しているが、墳丘の西側は舌状に尾根が伸びており、南西側は墳丘側に大きく湾曲している。この部分は後世に地滑り等で崩落した可能性も排除できないが、現状では自然地形として認識すべきものであろう。

試掘時のトレンチ片側壁を土層観察用の畦として残し、墳丘の掘削を行ったところ、この古墳には埴輪列・葺石等の外部施設が存在しないことが確認された。また段築も形成されていないことが判明した。

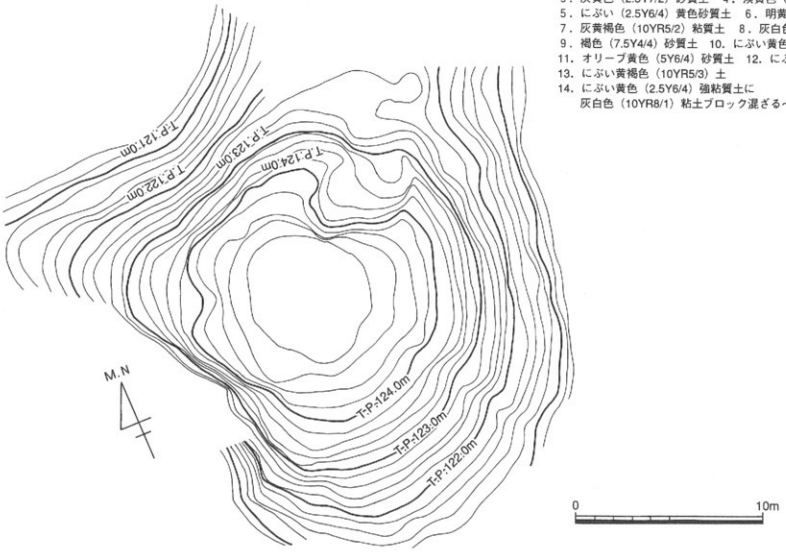
墳丘部の基本層序は１．表土、２．流土、３．地山であるが、墳丘北側の墳丘裾部地山上には強い粘性を帯びた土（第３図第14層）が堆積していることが確認された。土の縮まりが弱いため墳丘裾部の盛土とは考え難く、墳丘上部に行われた盛土が流出した可能性が高い。

丘陵から墳丘を区画する溝等の施設も検出されなかったため、この古墳は地山の隆起をある程度成形しただけの古墳であったものと考えられる。墳形・墳丘規模に関しては、北側における地山の立ち上がり、標高122.2mラインを墳丘裾部と考えると、墓壙の中心までの距離は約11mとなる。墳丘の北、東、南側ではコンタラインがほぼ正円を描き、122.2m以下のコンタラインが間隔をやや広めることから、直径22mを意識した円墳と認識しておく。また墳丘の西側から南西側の不整形な部分に関しては、上述したように自然地形をそのまま利用した部分と考える。これは、この部分が丘陵の東側平地部からは死角となること、また埋葬時の棺の搬入は丘陵の北側平坦部からと考えるのが妥当であり、その際にも墳丘の西側、南西側は労力を割いてまで墳丘を整える必要がなかったものと解釈できる。



第３図　墳丘断面図（Ｓ＝1/80）

1．表土　2．にぶい黄褐色（10YR5/4）砂質土～**盗掘抗埋土**
3．灰黄色（2.5Y7/2）砂質土　4．淡黄色（2.5Y8/3）砂質土に小礫が混ざる
5．にぶい（2.5Y6/4）黄色砂質土　6．明黄褐色（10YR7/6）砂質土
7．灰黄褐色（10YR5/2）粘質土　8．灰白色（10YR8/1）粘質土～**封土**
9．褐色（7.5Y4/4）砂質土　10．にぶい黄色橙色（10YR7/3）砂質土
11．オリーブ黄色（5Y6/4）砂質土　12．にぶい黄橙色（10YR7/4）砂質土
13．にぶい黄褐色（10YR5/3）土
14．にぶい黄色（2.5Y6/4）強粘質土に
　灰白色（10YR8/1）粘土ブロック混ざる～**盛土流土か**



第４図　廿山南古墳現況測量図（Ｓ＝1/200）

2．埋葬施設（第５図）

【盗掘坑】墳頂部の表土を掘削した時点で、長さ約２ｍ、幅約1.5ｍの楕円形の掘り込みが確認された。この掘り込みは盗掘坑と思われるが、墓壙埋土が地山状の土が堅く締まっている状態であったため、深さ約0.7ｍの地点で止まっている。埋土内からは、少量の須恵器片が出土している。

【封土】表土下には灰黄色（2.5Y7/2）砂質土が堆積していたが、その下層において灰白色（10YR8/1）粘質土が南北を長軸とする長方形に広がっていることを確認した（第３図第８層、第５図第１層、図版２下）。この粘質土は土質から見て自然堆積とは考えられず、墓壙の封土として人為的に設けられたものと考えられる。またこの粘質土の上面、中央南側において**鎌**１点を検出した。**鎌**は直立した状態で検出されており、原位置をほぼ留めているものと考えられる。

このことから、墓壙の埋め戻し最終段階で副葬行為が行われたことは確実と言える。このことは墳丘周辺の表土、流土から計12個体の須恵器が出土していることからも裏付けられる。この副葬状況に関する詳細は、第Ⅲ章３の遺物の副葬状況、第Ⅳ章の遺物で記述する。

【墓壙】この封土下において平面長方形の墓壙を検出したのであるが、墓壙は封土の長軸方向がほぼ南北方向であることとは異なり、南西－北東方向、座標北に対してＮ－30°－Ｅに設けられていた。墓壙の規模は掘り方で長辺約5.7ｍ、短辺約3.5ｍのほぼ長方形である。底面は長辺約5.2ｍ、短辺約3.0ｍである。肩部から床面までの深さは、北西長辺側では約1.2ｍ、南東長辺側では約0.9ｍである。この差は床面がほぼ平坦であることから地山の自然傾斜に起因するものと考えられる。

この墓壙の特徴の一つとして、長辺北西側、南東側の掘り方の違いが挙げられる。北西側では長辺をほぼ直線的に約70°の傾斜で底面まで掘り下げているのに対し、南東側では弧状に掘り方を拡張し、ひとまず肩部から約0.6ｍまで掘り下げ、その高さに平面弓弦形に最大幅約0.45ｍの平坦部を作り出している。さらにその部分から約0.3ｍ掘り下げて床面に達している。

この平坦部は、地山の低い墓壙の片側辺にのみ存在しているという事実、また木棺の推定規模、墓壙の深さから考えて、木棺を墓壙床面に運び入れるための施設と見なすのが妥当であろう。

【墓壙内埋土】墓壙内の埋土（棺安置後の埋め戻し土）は、地山との判別が困難なほど土質が似通っており、墓壙掘削時に排出した土をそのまま利用したものと考えられる。墓壙長軸断面、短軸断面を観察すると、壁側から内側に向かい土が傾斜して堆積している状況が認められた。これは、木棺が腐食して崩壊する際に埋土が空間側に落ち込んだ状況を示すものである。

また墓壙床面の北西側、木棺を安置したと考えられる部分には、不自然な土の堆積が観察できる。すなわち、墓壙の主軸断面、主軸直交断面の第31層～第35層、主軸断面の第74層がそれである。この不自然な堆積は、木棺の天井板、側板、小口板が保っていた空間の範囲を示しているものと考えられる。

この他に、墓壙南西端部において、肩部から約0.2ｍの深さに須恵器蓋杯11点が、その北西0.5ｍの位置には須恵器壺、須恵器杯蓋が、また墓壙長軸中央南西よりの北東壁付近に馬具（鈴具）２点が出土している。これらの遺物は、それぞれ検出された高さにおいて違いが見られる。しかしながら、墓壙壁側の遺物が高い位置で、内側の遺物が低い位置で検出されている所から見て、本来同一面に副葬されていたと考えられる。墓壙主軸断面、直交断面に出土高を投影した図からも齟齬を来さない（第５図透過紙参照）。このことに関しての詳細も、第３章３の遺物の副葬状況、第４章の遺物で記述する。

また注目すべき事として、墓壙埋土から多量の須恵器片が出土していることが挙げられる。これ

らの破片は墓壙全域、また埋土の最高所から床面付近にわたって出土している。個体数が甕1点、杯身1点、杯蓋1点、短頸壺1点に限定されていることから見ても自然な混入状況とは考え難い。埋土が墓壙掘削時に排出した土を利用したものと考えられることから、意識的に混入させたものと見なすべきであろう。

【床面（図版4）】床面では、墓壙主軸やや北西側に木棺の痕跡を検出した。

南西側短壁に接して粘土塊が検出された。この粘土塊は短壁沿いに長さ約1.4m、最大幅約0.45mの範囲に残存していた。厚みは最大で0.12mであるが、北西側には主軸方向に一部粘土が薄くなる部分がある。また粘土の長辺北東側には0.05～0.07mの幅で粘土が薄く押しつぶされている部分が存在する。この他に、粘土のほぼ中央で主軸方向に幅0.1mの範囲で僅かに炭化物が付着している部分が確認された。

また、床面主軸に直交する方向の棒状のものが地山に陥入している痕跡を2カ所で確認した。南西側短壁から主軸方向にそれぞれ約1.1m、約3.6m地点に位置する。ここでは前者を**棒状痕跡1**、後者を**棒状痕跡2**として報告を行う。

棒状痕跡2は直線的に伸びるものであり、残存長1.3m、最大幅0.13mを測る。この痕跡の埋土は灰黄色（2.5Y6/2）を帯びているが、この内中央の長さ0.75m部分は埋土が粘質であり、周囲に赤色顔料が僅かに残存していた。埋土を掘り下げたところ、この痕跡の断面形は「U」字形であり、赤色顔料はその外縁すべてに遺存していることが明らかとなった。

これに対して棒状痕跡1は1本の直線ではなく「二」字状の痕跡であり、下線が中央で分断されている形状で検出された。上線は残存長0.4m、最大幅0.18mであるが、中央部がやや凹みダルマ形を呈している。断面は幅広の浅い「U」字形であり、棒状痕跡2同様周縁には赤色顔料が遺存している。下線は北西端部から南東端部までの長さが1.55mであり、中央には幅0.13mの空間がある。痕跡の断面は「U」字形である。痕跡内側の周縁には赤色顔料が遺存している。

上記したもの以外には、床面に棺の痕跡は検出されなかった。検出した痕跡から棺の構造を推定すると、恐らく棒状痕跡は棺に付属する桟状の部分の痕跡、または木棺の底板を連結するための「ちきり」状施設の痕跡ではないかと考えている（註1）。棺に桟状の構造物を有する木棺は奈良県大和高田市三倉堂遺跡の1号木棺が挙げられる（註2）。また木棺木口側に粘土塊を充填する手法は多数報告例がある（註3）。それらは木口両側に粘土塊を充填するものが多数を占めるようであるが、甘山南古墳では木棺木口片側にのみ粘土塊が存在することが特徴である。

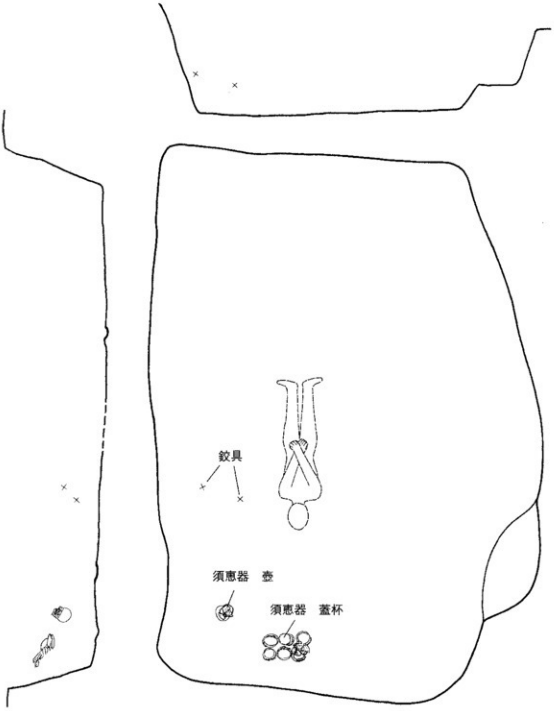
副葬遺物は、粘土塊の北東側に須恵器脚付有蓋壺、土師器壺が、そのやや西側に鉄鏃3点が出土している。また周囲には少量であるが朱が広がっている（註4）。墓壙のほぼ中央部北東側からは、管玉、棗玉などの玉類が、また鉄製大刀、刀子が各1点出土している。これらに関して詳細は第Ⅲ章3遺物の副葬状況と第Ⅳ章遺物で記載する。

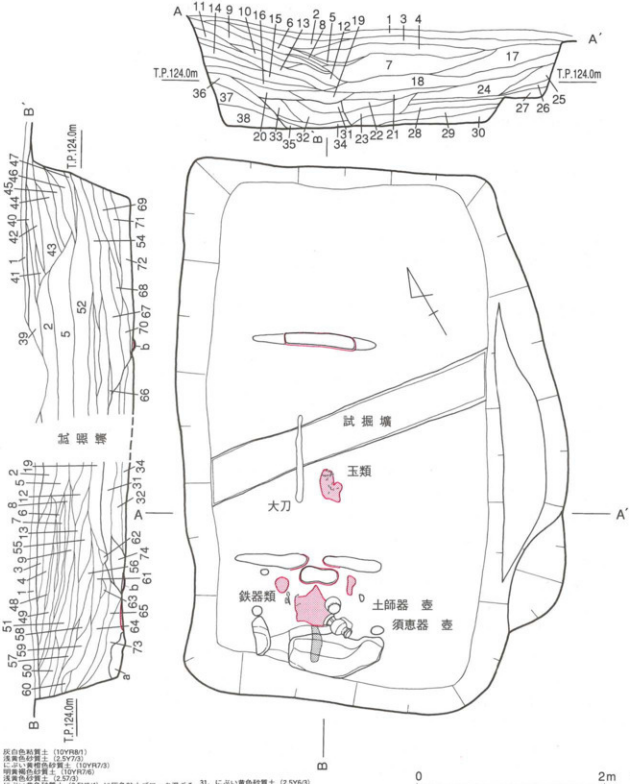
以上の木棺の痕跡、また遺物の出土位置は、墓壙床面の中央よりやや北西側に偏っている。空間的には南東側に棺1体分程度の余裕があるのだが、南東側には遺物や副葬、祭祀の痕跡は何ら見あたらなかった。墓壙床面積の大きさは直接埋葬にかかる労力に結びつくため、何らかの必然があるものと考えられるが、現状では十分な説明が行えない。今後の検討課題となるところである。

【註】

1）小林行雄（1964）「Ⅰ．結合　二．石棺木櫃」，塙書房（編）『続古代の技術』所収，東京

2）岸熊吉（1934）「木棺出土の三倉堂遺跡及遺物調査報告」，奈良県（編）『奈良縣史跡名勝天然紀念物調査報告』第12冊　所収，奈良

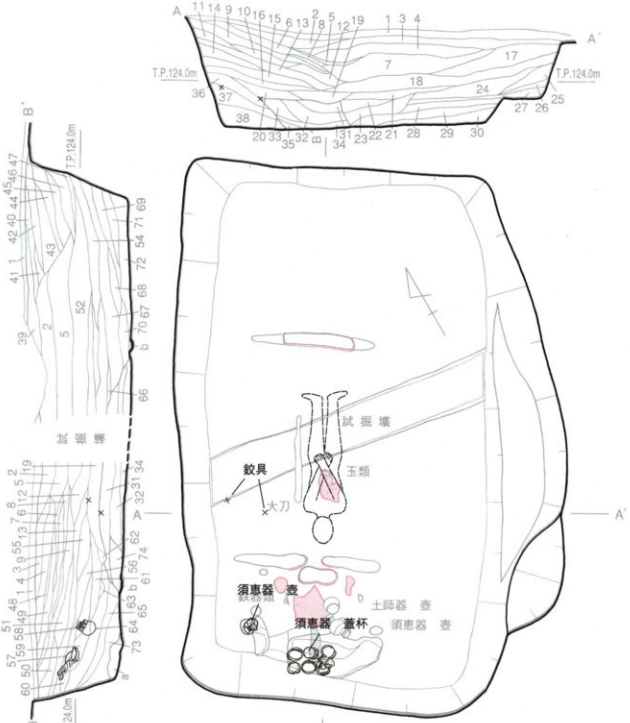

鉸具
須恵器　壺
須恵器　蓋杯



1．灰色粘質土（10YR8/1）
2．浅黄色砂質土（2.5Y7/3）
3．にぶい黄橙色砂質土（10YR7/3）
4．明黄褐色砂質土（10YR7/6）
5．浅黄色砂質土（2.5Y7/3）
6．にぶい黄色砂質土（2.5Y6/4）に灰色粘土ブロック混ざる
7．灰黄色砂質土（2.5Y7/2）
8．灰黄褐色砂質土（10YR6/2）に小礫混ざる
9．にぶい黄色砂質土（2.5Y6/3）に灰色粘土ブロック混ざる
10．灰黄色砂質土（2.5Y6/2）
11．灰色粘質土（2.5Y7/1）
12．にぶい黄色砂質土（2.5Y6/4）
13．にぶい黄色砂質土（2.5Y6/3）
14．灰黄色砂質土（2.5Y6/2）
15．黄橙色砂質土（2.5Y5/4）に灰色粘土ブロック混ざる
16．黄橙色砂質土（2.5Y5/3）
17．にぶい橙色砂質土（10YR6/3）
18．にぶい黄色砂質土（2.5Y6/4）
19．浅黄色砂質土（2.5Y7/3）
20．灰黄色砂質土（2.5Y7/2）に小礫混ざる
21．灰黄色砂質土（2.5Y7/2）
22．灰黄色砂質土（2.5Y6/2）
23．灰黄色砂質土（2.5Y6/2）
24．浅黄色砂質土（2.5Y7/3）
25．にぶい黄色砂質土（2.5Y6/3）
26．黄灰色粘質土（2.5Y6/1）
27．にぶい黄色砂質土（2.5Y6/4）に小礫混ざる
28．黄橙色砂質土（2.5Y5/3）に小礫混ざる
29．暗灰黄色砂質土（2.5Y5/2）
30．黄橙色砂質土（2.5Y5/4）に小礫混ざる
31．にぶい黄色砂質土（2.5Y6/3）
32．灰黄色砂質土（2.5Y6/2）
33．浅黄色砂質土（2.5Y7/3）
34．黄橙色細粘質土（2.5Y5/3）
35．黄灰色細粘質土（2.5Y6/1）
36．にぶい黄色砂質土（2.5Y6/3）
37．灰黄色砂質土（2.5Y6/2）
38．にぶい黄色砂質土（2.5Y6/3）に小礫混ざる
39．浅黄色砂質土（2.5Y7/3）に小礫混ざる
40．灰黄色砂質土（2.5Y7/2）
41．浅黄色砂質土（2.5Y7/3）
42．にぶい黄色砂質土（2.5Y6/3）
43．にぶい黄色砂質土（2.5Y6/3）
44．浅黄色砂質土（2.5Y7/3）
45．にぶい黄橙色砂質土（10YR7/2）に灰色粘土ブロック混ざる
47．灰黄色砂質土（2.5Y6/2）
48．にぶい黄橙色砂質土（10YR7/3）
49．灰色砂質土（10YR6/1）
50．にぶい黄橙色砂質土（10YR6/4）に小礫混ざる
51．灰色粘質土（2.5Y7/1）
52．にぶい黄色土（2.5Y6/4）
53．にぶい黄色砂質土（2.5Y6/4）
54．にぶい黄色砂質土（2.5Y6/3）に小礫混ざる
55．にぶい黄橙色砂質土（10YR5/4）に小礫混ざる
56．灰黄色細粘質土（2.5Y6/2）
57．灰黄色砂質土（2.5Y6/2）
58．にぶい黄橙色砂質土（10YR6/3）
59．灰黄色砂質土（2.5Y7/2）
60．黄灰色砂質土（2.5Y6/1）
61．浅黄色砂質土（2.5Y8/3）に小礫混ざる
62．灰色砂質土（2.5Y7/1）
63．にぶい黄色砂質土（2.5Y6/3）に小礫混ざる
64．灰黄色砂質土（2.5Y6/2）
65．灰黄色砂質土（2.5Y6/2）
66．灰黄色砂質土（2.5Y6/2）
67．にぶい黄色砂質土（2.5Y6/3）
68．にぶい黄色細粘質土（2.5Y6/3）
69．灰黄色砂質土（2.5Y6/2）
70．灰黄色砂質土（2.5Y6/2）に灰色粘土ブロック混ざる
71．黄灰色砂質土（2.5Y6/1）
72．黄灰色細粘質土（2.5Y6/1）
73．黄灰色砂質土（2.5Y6/1）
74．暗灰黄色砂質土（2.5Y5/2）

a．灰色（7.5Y8/1）粘土
b．灰黄色（2.5Y6/2）粘質土

第５図　主体部平面図・断面図



1. 灰白色粘質土（10YR8/1）
2. 浅黄色砂質土（2.5Y7/3）
3. にぶい黄橙色砂質土（10YR7/3）
4. 明黄褐色砂質土（10YR7/6）
5. 浅黄色粘質土（2.5Y7/3）
6. にぶい黄色砂質土（2.5Y6/4）に灰色粘土ブロック混ざる
7. 灰黄色砂質土（2.5Y7/2）
8. 灰黄褐色砂質土（10YR6/2）に小礫混ざる
9. にぶい黄色砂質土（2.5Y6/3）に灰色粘土ブロック混ざる
10. 灰黄色砂質土（2.5Y6/2）
11. 灰白色粘質土（2.5Y7/1）
12. にぶい黄色砂質土（2.5Y6/4）
13. にぶい黄色砂質土（2.5Y6/3）
14. 灰黄色砂質土（2.5Y6/2）
15. 黄褐色砂質土（2.5Y5/4）に灰色粘土ブロック混ざる
16. 黄褐色砂質土（2.5Y5/3）
17. にぶい黄橙色砂質土（10YR6/3）
18. にぶい黄色砂質土（2.5Y6/4）
19. 灰黄色砂質土（2.5Y6/2）
20. 灰黄色砂質土（2.5Y6/2）に小礫混ざる
21. 灰黄色砂質土（2.5Y7/2）
22. 灰黄色砂質土（2.5Y6/2）
23. 灰黄色粘質土（2.5Y6/2）
24. 浅黄色砂質土（2.5Y7/3）
25. にぶい黄色砂質土（2.5Y6/3）
26. 黄灰色粘質土（5Y6/1）
27. にぶい黄色砂質土（2.5Y6/4）に小礫混ざる
28. 黄褐色砂質土（2.5Y5/3）に小礫混ざる
29. 暗灰黄色砂質土（2.5Y5/2）
30. 黄褐色砂質土（2.5Y5/4）に小礫混ざる
31. にぶい黄色砂質土（2.5Y6/3）
32. 灰黄色砂質土（2.5Y6/2）
33. 浅黄色砂質土（2.5Y7/3）
34. 黄褐色砂質土（2.5Y5/3）
35. 黄灰色粘質土（2.5Y6/1）
36. にぶい黄橙色砂質土（10YR6/3）
37. 灰黄色砂質土（2.5Y6/2）
38. 黄褐色砂質土（2.5Y5/3）に小礫混ざる
39. 浅黄色砂質土（2.5Y7/3）に小礫混ざる
40. 浅黄色砂質土（2.5Y7/3）
41. 浅黄色砂質土（2.5Y7/3）
42. にぶい黄色砂質土（2.5Y6/3）
43. にぶい黄色砂質土（2.5Y6/3）
44. 浅黄色砂質土（2.5Y7/3）
45. にぶい黄橙色砂質土（10YR7/2）に灰色粘土ブロック混ざる
47. 灰黄色砂質土（2.5Y6/2）
48. にぶい黄色砂質土（10YR7/3）
49. 灰色砂質土（10YR6/1）
50. にぶい黄橙色砂質土（10YR6/4）に小礫混ざる
51. 灰白色粘土（2.5Y7/1）
52. にぶい黄色砂質土（2.5Y6/4）
53. にぶい黄色砂質土（2.5Y6/4）
54. にぶい黄色砂質土（2.5Y6/3）に小礫混ざる
55. にぶい黄橙色砂質土（10YR5/4）に小礫混ざる
56. 灰黄色砂質土（2.5Y6/2）
57. 灰黄色砂質土（2.5Y6/2）
58. にぶい黄橙色砂質土（10YR6/3）
59. 灰黄色砂質土（2.5Y7/2）
60. 黄灰色砂質土（2.5Y6/1）
61. 浅黄色砂質土（2.5Y6/3）に小礫混ざる
62. 灰白色粘質土（2.5Y7/1）
63. にぶい黄橙色砂質土（2.5Y6/3）に小礫混ざる
64. 灰黄色砂質土（2.5Y6/2）
65. 灰黄色砂質土（2.5Y6/2）
66. 灰黄色砂質土（2.5Y6/2）
67. にぶい黄色砂質土（2.5Y6/3）
68. にぶい黄色粘質土（2.5Y6/3）
69. 灰黄色砂質土（2.5Y6/2）
70. 灰黄色砂質土（2.5Y6/2）に灰色粘土ブロック混ざる
71. 黄灰色砂質土（2.5Y6/1）
72. 黄灰色粘質土（2.5Y6/1）
73. 黄灰色砂質土（2.5Y6/1）
74. 暗灰黄色砂質土（2.5Y5/2）

a．灰色（7.5Y6/1）粘土
b．灰黄色（2.5Y6/2）粘質土

第５図　主体部平面図・断面図

3）藤原光輝（1963）「組合式木棺について」，奈良県立橿原考古学研究所（編）『近畿古文化論攷』所収，東京
4）この朱に関しては，付編　科学的分析で詳細を記す。

3．遺物の副葬状況

上述の通り、廿山南古墳では３回の遺物の副葬が行われている。まず最初が棺安置時の副葬であり（第１次副葬）、２度目は墓壙をある程度埋めた時点での副葬（**第２次副葬**）、最後は墓壙を完全に埋めて封土を施した時点での副葬（**第３次副葬**）である。ここでは、副葬が行われた順にその状況を記述する。

【第１次副葬（第５図・図版４～６）**】**副葬位置は、大きく２カ所に分けられる。一つは木棺南西木口側の粘土塊と棒状痕跡１との間であり、（**第１群**）、一つは棒状痕跡１と２の間で、木棺中央部に推定される部分である（**第２群**）。

第１群は土器類と鉄器類、朱で構成される。土器類では須恵器脚付有蓋壺、土師器甕が主軸に平行する並びで出土している。個体は両者共に口縁を南方向に傾けて検出されているが、副葬時に正置されていた状況をよく留めている（図版５参照）。土器類の北西隣には鉄器類が検出された。無茎鏃１点と有茎鏃２点である。この内無茎鏃１点と有茎鏃１点は刃部先端を北東方向に向けている。残りの有茎鏃１点は破損が激しく向きは不明である。

これらの遺物は、薄く広がる朱の直上から検出されている。須恵器脚付有蓋壺は台端部が朱を抉って地山に差し込まれた状態で出土しているが、これは土圧の影響を受けたものと考えられる。

この様な状況から、第１群は木棺内木口側、恐らく内部を仕切り板で区画して作り出した空間に副葬された遺物群と認識される。

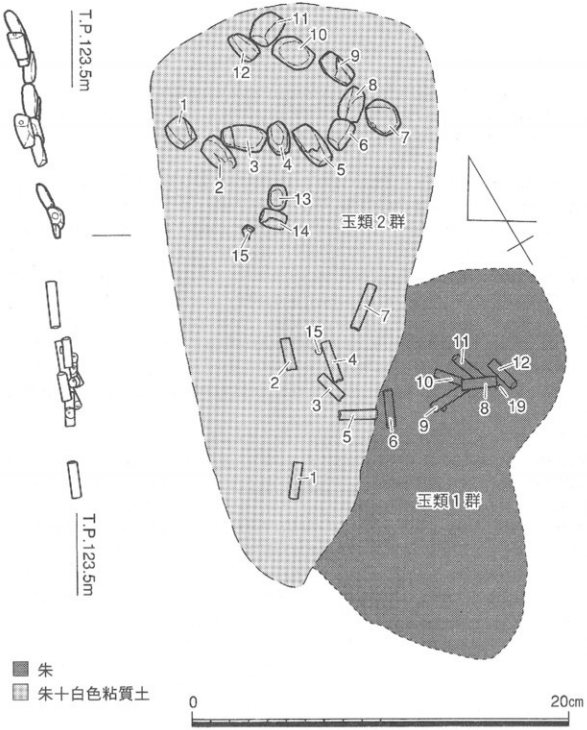
第２群は玉類、鉄器、金製品で構成される。玉類は、碧玉製管玉とガラス製小玉、ガラス製？連玉[註1]で構成される**玉類１群**、琥珀製棗玉で構成される**玉類２群**に分けられる（第６図、図版６上参照）。

玉類１群は、碧玉製管玉14点（玉類１－１～14）、緑色ガラス小玉１点（玉類１－15）、青色ガラス小玉１点（１－16）、水色ガラス小玉１点（玉類１－17）、連玉（玉類１－18～20）で構成される。この内管玉２点（玉類１－13、14）は床面検出時の排出土から発見されたため、出土状況は不明である。また青色ガラス小玉（１－16）、連玉の大部分は遺物整理作業の洗浄時に発見されたものである。水色ガラス小玉（１－17）は管玉（玉類１－９）の孔内に入り込む状況で出土している。この他に、玉類１群周辺土の洗浄時に、１㎜に満たない濃紺のガラス小片が発見されているため、ガラス小玉がもう１点存在していたものと考えられる。

検出状況に関しては、管玉は北西－南東方向に広がる形で検出されている。管玉はいずれも片面穿孔されたものであるが、出土状況からは孔の向きの有意な関係は見いだされない。また、現地で検出できたものに限れば、小玉、連玉は南東側の管玉（玉類１－８～12）と関連する配置で出土している。ただし、緑色ガラス小玉は管玉（玉類１－４）に接して出土している。

玉類２群は琥珀製棗玉15点で構成されている[註2]。玉類１群同様に北西－南北方向に広がる形状であるが、ほぼ環形を保って検出された（玉類２－１～12）。環の内部空間は長さ約7㎝、幅約3㎝である。また３点はやや南側に離れて出土している（玉類２－13～15）。

玉類１・２は南西から北東方向に傾斜する状況で出土している。これは墓壙の床面、棺の底板の傾斜を良好に反映しているものと考えられる。



第6図　第1次副葬玉類出土平面図

また、これらの玉類の周囲には朱が良好に残存していた。注目されるのは、玉類1の北西側から玉類2を覆う範囲で白色の粘質土が検出されていることである。この粘質土は糸が引くほどの粘性を有しており、何らかの有機物の残存と考えられる。

鉄器類は大刀、刀子で構成される。大刀は木棺推定位置の主軸から北西側に偏して出土している。柄を南西方向に、切先を北東方向に向けており、刃部は棺中央主軸から見て外側に向いた状況で出土している。検出時に鞘と考えられる木質が遺存していることが確認されたため、現地調査時にはある程度錆土を残した状況で記録保存を行った[註3]。刀子は大刀の木質の遺存が認められる前に錆土除去段階で出土した。大刀の切先に接する状況で出土したことは確実であるが、正確な出土状況

は記録できていない。

この他に、金製の耳環が出土している。この耳環は試掘調査時の墓壙内埋土から出土したものであるが、排出土の篩がけの際に発見されたものであるため正確な出土位置、出土状況は不明である。しかしながら、試掘時の記録から排出土が床面付近のものであり、第1次副葬に伴うものであることは確実である。

以上の遺物は、出土位置、出土状況から見てすべて棺内副葬品として認められるものである。出土遺物の位置から棺内の被葬者の頭位を復元すると、①南西側木口に副葬空間がある。②床面（棺床板）が南西から北東に傾斜している。③大刀が棺推定位置の中央主軸から北西側に偏して納められ、切先を北東方向に向けている、などの理由から、南西頭位に復元される。この場合、被葬者の位置は玉類2が復元の基礎資料となり得るだろう。玉類2は出土状況において環形を保っており、内部の空間が長さ約7㎝、幅約3㎝であることはすでに述べた所である。玉類2の15点の全長の総計は25.35㎝であり、頸飾りとしての使用が困難であることは明白である[註4]。現状では手首に巻かれていたとする復元が妥当であろう。また、金製耳環は試掘坑から出土しているという事実、また1点のみの出土ということから、耳環以外の使用、憶測が許されるならば指輪などの使用を考えたい。環の内面最大径は1.4㎝であり、成人男性の指では使用は難しいが、女性の指ならば可能性が残るものと思われる。

以上から被葬者の棺内での位置を推定したものが第5図の透過紙である。

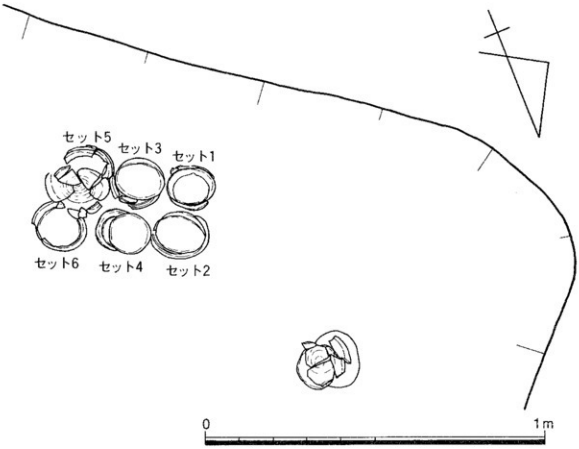
【第2次副葬（第5図透過紙）**】** 棺をある程度の高さにまで埋めた段階での副葬行為である。

墓壙南西側短壁付近で、須恵器蓋杯、須恵器壺が検出された。須恵器蓋杯は墓壙短壁に平行する形で杯蓋、杯身がセットで3列2段に配置されている（第6図、図版3参照）。これらのセットは墓壙肩側から内部に向かって傾斜しているが、これは前述したように木棺の腐敗により埋土が陥没した状況を示すものと考えられるため、副葬時はほぼ面を揃えていたものと思われる。この蓋杯セットを北西側から南東側に上下にセット1～6と名付けると、セット1は蓋を下、身を上に配置し、セット2～4は身を下、蓋を上に配置している。いずれの蓋、身とも内面を上に向けて重ねられている。これに対し、セット5は身を下、蓋を上にしているが蓋を身にかぶせた状況で出土している。また、セット6は身のみで蓋を欠いている。また、セット2は身の口径に対して蓋の口径が小さすぎ、セット5は身の口径に対して蓋の口径が大きすぎるなど、蓋杯の食器機能としてのセット関係は有していないようである。

この蓋杯群の北西側に、須恵器壺が出土している。口縁をやや墓壙内部に傾斜させた状態で出土しており、蓋として杯蓋を使用している。

これらの土器に埋入している土は、遺物整理作業時に洗浄を行い内容物を確認したが、須恵器壺から極少量の炭化物が出土した以外には何も確認されなかった。

この他に、墓壙南西側短壁から主軸方向北東側に約2m、北西側長壁寄りの位置から鉄製馬具2点が出土した。2点とも鈴具であるが、内1点は試掘時に粉砕してしまい復元が不可能である。このように墓壙内に他の馬具類が存在せず鈴具のみが存在する例としては、奈良県橿原市新沢千塚179号墳が挙げられる。この古墳では、墓壙床面の棺内木口側において、須恵器類（提瓶、高杯、鼎）、砥石、錐、鑿とともに鈴具1点が出土している。報告者は、これらの遺物を袋詰めにし、鈴具をつけた紐で縛り、鈴具のみが遺存したのではないかと推測している[註15]。廿山南古墳では鈴具のみが遺存しているが、重要な視点と言える。



第７図　第２次副葬須恵器類出土平面図

これらの遺物は、ここでは第２次副葬として同時的な副葬行為として認識した。各遺物の出土高の相違に対しては、木棺の腐食による埋土の陥没を根拠としている。しかしながら、厳密には各遺物の混入する層位が確認できているわけではないため、須恵器蓋杯セットと鉸具１点、須恵器壺と鉸具１点が２次にわたり副葬されている可能性なども残している。

【第３次副葬（図版２下）**】**墓壙を完全に埋めて封土を施した段階での副葬である。発掘調査では第３次副葬は鎌がある程度原位置を保っていることが確認されているに過ぎない。ここでは、墳丘表土、流土から出土した土器類を第３次副葬に用いられたものとして認識しておく。第３次副葬を構成する土器類はすべて須恵器であり、器種としては有蓋小型短頸壺２、壺蓋２、杯身２、杯蓋２、器台１、高杯１、鎌１、壺１、脚台１である。

以上が廿山南古墳における遺物の副葬状況である。この様に、古墳時代後期の木棺直葬を埋葬主体とする古墳では、棺内遺物以外にも墓壙埋め戻し過程から埋め戻し後、もしくは墓壙の掘方肩部、墓壙外に遺物の副葬が行われる例は多数報告されている。前記した新沢千塚ではこの様な埋葬形態を有する古墳が多数確認されており、また大阪府柏原市大平寺古墳群Ｄ尾根２号墳（註6）、大阪府枚方市宇山２号墳（註7）、本市の板持２号墳などはこの好例であろう（註8）。

副葬遺物の配置に関しては、廿山南古墳では第１次副葬は被葬者頭部側木棺木口、木棺中央部に集中していることが特徴である。第２次副葬もこの配置に準じて行われており、遺物の副葬位置に対する何らかの規範があったようである。

【註】

1）この連玉に関しては，透明に近く内部に気泡が見られる個体と，白色で材質の非常に脆い個体とが存在する。成分分析を行っていないために材質が何であるかは明言を避ける。

2）玉類２は琥珀の遺存状況が非常に脆弱であったため，出土状況のまま密封し，周囲の土ごと取り上げて保存処理を行った。

3）玉類２同様の取り上げ方法を行った。

4）玉類２－15は破損が著しいが，全長が大きく変わることはない。また，各玉は非常に密接して出土しており，玉と玉との空間が大きく空いていたとは考え難い。

5）伊達宗泰（1981）「179号墳」，奈良県立橿原考古学研究所（編）『新沢千塚古墳群』所収，奈良

6）この古墳に関しては，報告者は２基の埋葬施設の存在を推定しているが，棺内遺物、棺外遺物として認識した方が良いと思われる。出土遺物から時期的には廿山南古墳よりやや古い６世紀初頭と考えられる。北野重・竹下　賢・山内都（1983），柏原市教育委員会（編）『太平寺古墳群』（柏原市埋蔵文化財発掘調査概報8　2－Ⅳ），柏原（大阪）

7）西田敏秀（1994）「１宇山遺跡（第15次調査）」，財団法人枚方市文化財研究調査会（編）『枚方市文化財年報13（1991年度分）』所収，枚方（大阪）

8）堀江門也（1967），富田林市教育委員会（編）『富田林市板持古墳群調査概報』，富田林（大阪）

第Ⅳ章　出土遺物

この章では，前述した副葬順序に即して各遺物の報告を行う。なお、土器類に関しては巻末に観察表を、玉類は同様に計測表を添付している。

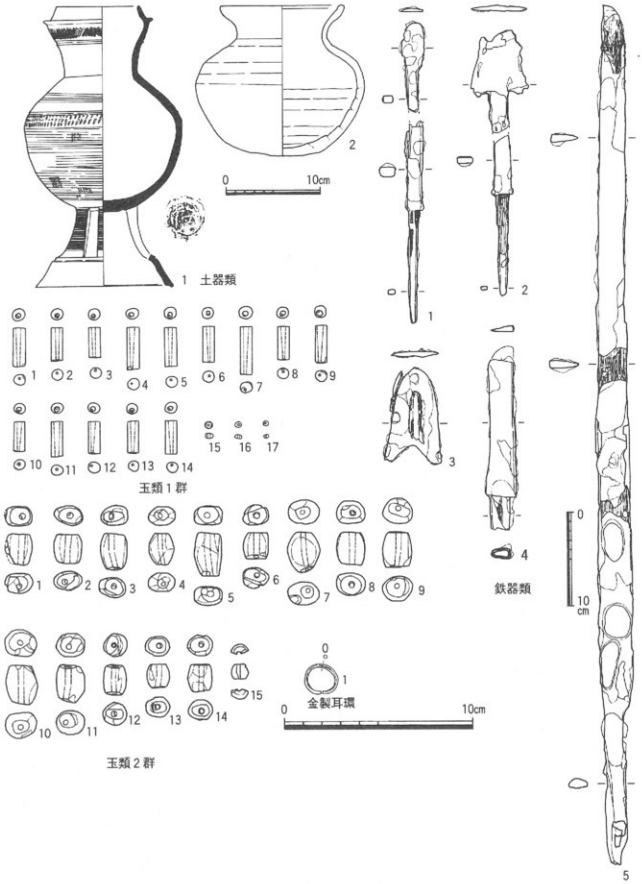
１．第１次副葬遺物（第８図）

【土器類（図版７）**】** １は脚付の有蓋壺。壺本体に対して短い脚部を有するものであり，脚部には３方向に長方形スカシが入る。壺体部はあまり腹が張らない球形であり，体部上半には櫛による刺突が施される。頸部は凹線で区画した施文帯に波状文を施している。また，底部には同心円のスタンプが見られる。口縁部には蓋を被せて焼成しており，熔着した蓋口縁を打ち欠いた痕跡が残る。２は土師器壺。精選された胎土であり，粘土紐の巻き上げ痕跡が明瞭に残る。やや腹部の張る球形の体部であり，短い頸部から外反して口縁を形成するが，口縁端部はほぼ垂直に立ち上がっている。

【玉類（図版12）**】** 玉類１群（第５図参照）の１～14は碧玉製管玉。いずれも片面穿孔が行われたものである。玉の全長は16～25.5㎜であり，直径は5.7～6.5㎜である。孔径は穿孔側は2.5～３㎜であり，貫通側は0.7～１㎜である。

15～17はガラス小玉である。15は緑色のガラスであり，直径４㎜、厚さ2.5～2.8㎜、孔径1.2㎜、重量0.1ｇを測る。上下面はやや丸みを帯びる。16は青色のガラスであり，直径3.2㎜、厚さ1.7～2.2㎜、孔径1.5㎜、重量0.07ｇを測る。内部の気泡は上下の伸びが見られず球形をなしていることから、鋳型作りのものと考えられる。17は水色のガラスであり，直径３㎜、厚さ1.9㎜、残存重量0.05ｇを測る。この他に、玉類１群周辺土の洗浄中に濃紺のガラス片が検出されている。このことにより、少なくともガラス小玉は４固体存在したものと考えられる。

また玉類１群には連玉が存在する（図版12下参照）。これは直径２～３㎜の小玉が連なるものであり、材質としてはやや銀色がかった透明で気泡が見られるものと、白色で肉眼では気泡が確認できないものとの２種がある。前者では現状で最大７つの玉が連なっているものが確認されている（図版12の左から６番目）。現長11.2㎜、玉の直径2.3㎜、孔径１㎜であるが、両端部共に折損したような破断面を有しているため、さらに玉が連なっていた可能性が高い。後者は前者に比して遺存状



第8図　第1次副葬遺物（土器S=1/4、拓本S=1/2、玉類S=1/2、鉄器類S=1/2、大刀S=1/4）

態が悪く、大多数は玉の連結部で折損しているが、現在２つの玉が連なるものが確認されている。この材質に関しては鑑定を行っていないために留保しておきたい。

玉類２群はすべて琥珀製の棗玉である。管玉とは異なりいずれも両面穿孔が行われているが、これは材質の弱さに起因する手法の違いと思われる。全長は完形品で13㎜～24㎜、最大幅は12.5㎜～16.5㎜、重量は1.1ｇ～3.1ｇまでのものである。

【鉄器類（図版13・14）**】**鉄族は３点が出土している。１は破損品であるが同一個体と考えられる有茎の柳葉鏃である。鏃身は両刃であり、長さ2.2㎝、最大幅1.2㎝を測る。茎部は有段であり、長さ6.0㎝を測る。茎部上方には縦方向の木目を有する矢柄が遺存している。また、茎最上部には樹皮状の木質が一部残っている。このことから鏃と矢柄との装着方法は、茎を矢柄に挿入した後に樹皮を巻き付けたものと考えられる。２は長三角形の鏃身を有する有茎鏃である。鏃身は両刃であり、先端部は鋳上がりが悪いためか欠失している。現長3.3㎝、最大幅3.05㎝である。１と同様の茎部を有しており、同様に縦方向の木目の矢柄、樹皮巻が遺存している。３は長三角形の逆刺を有する無茎鏃である。全長5.2㎝、最大幅3.1㎝、重量7.4ｇを測る。両丸造りの両刃であり、両面中央部には矢柄が遺存している。矢柄は幅約0.8㎝であり、先端を丸く加工したものと考えられる。このことから、鏃と矢柄との装着方法が根挟み式であったことが分かる。また、鏃表面には部分的に漆状の物質が付着している。刃部片側には鉄片が錆着している。

４は刀子であり、５の大刀の切先付近からの出土である。切先部を欠失している。平造りで、関は刃部側は直角関であるが、背側は錆のためはっきりしない。茎部は中空であり、表面に一部木質と思われる部分が残る。現長9.1㎝、茎長1.8㎝、重量13.1ｇ。

５は直線的に伸びる刀身を有する大刀である。錆と砂の錆着で鉄原面が観察できる部分は少ない。関は片関で茎部に向かい斜めに切れ込んでいる。茎尻形態は柄により不明であるが、Ｘ線写真を見ると茎部は5.4㎝程度の長さであると思われる（図版15）。柄頭は環状に遺存しているが、意識的な造形であるかどうかは不明である。素材はには鹿角状のものが用いられているようであるが未鑑定である。刀身の切先と中程には鞘の木質が遺存している。全長91.0㎝。

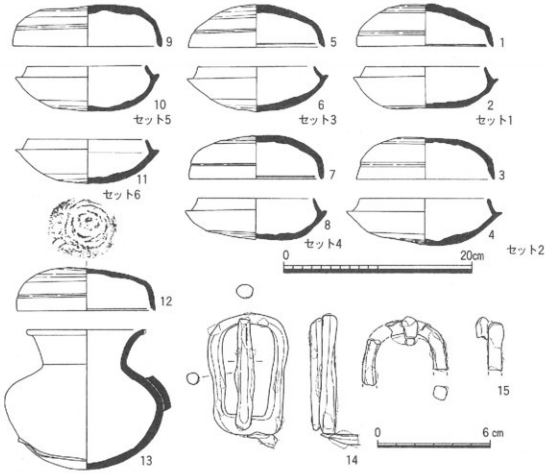
【耳環（巻頭カラー写真）**】**金製の耳環である。前述したように、試掘調査時に出土したものである。径約２㎜の細く棒状にした金を丸く曲げ、開き部を設けている。環の内面最大径は1.4㎝、重量1.95ｇである。出土位置から耳環とは考えられず、指輪等の使用が考えられる。

２．第２次副葬遺物（第９図）

【土器類（図版７・８）**】**出土品はいずれも須恵器である。

１～12は蓋杯。杯蓋はいずれも天井部と口縁部を凹線によって区画するものである。口縁端部は丸く収めるもの（３・９）と、内面に微弱な段もしくは凹線を形成するもの（１・５・７・12）がある。天井部は丸みを帯び口径は14㎝～15㎝であるが、９は天井が平坦であり口径15.7㎝と大型である。また、７・12は天井部内面中央に同心円のスタンプが見られる。他のものも内面中央は直線的な仕上げのナデ調整が行われており、同心円スタンプが消されている可能性がある。天井部外面ヘラ削り時のロクロ回転はいずれも右回り。

杯身はいずれも内傾する口縁部を有するものである。その中でも、やや直立気味に大きく立ち上がる２・４・８と内傾度が強く短く立ち上がる６・10・11とが見られる。口縁端部はいずれも丸く収めている。口径は12㎝～13㎝であるが、４は13.9㎝と大型である。底部はほぼ平底の２を除くと



第９図　第２次副葬遺物（土器S=1/4、拓本S=1/2、鉄器S=1/2）

緩やかな丸みを帯びたものである。10の底部内面中央には同心円スタンプがかすかに残る。他のものも杯蓋同様内面中央部に直線的な仕上げのナデ調整が行われているため、スタンプが消されている可能性がある。底部外面ヘラ削り時のロクロ回転はいずれも右回り。

13は壺。器形的には無蓋の壺であるが、杯蓋12を壺蓋として使用している。丸底でやや腹部の張る球形の体部を有し、口縁は緩やかに外反している。体部下半から底部にかけては回転ヘラ削りが行われる。削り時のロクロ回転は右。底部外面には杯身の口縁部が、体部には内面に同心円の当て具痕を有する甕もしくは壺の体部片が熔着している。破断面には打ち欠いた痕跡が見られる。また壺口縁の一部が破損しているが、その位置が体部に破片が熔着している面に当たるため、これも人為的に熔着部分を打ち欠いた痕跡と考えられる。

【鉄器類（図版13）**】**馬具２点が出土している。いずれも鈴具であり、縛り具として使用したものと考えられる。14はほぼ完形で出土している。枠部の平面形態は楕円形であるが、基部はやや直線的である。断面は円形であり、直径は約６㎜。刺金は断面円形のものであるが、基部側での接続方法は不明である。また、基部外面にはさらに鉄片が付着しているが、これが同一個体であるのか別の鉄器が銹着したものであるのかは不明である。現長7.1㎝、最大幅4.2㎝。重量30.4ｇを測る。15は試掘時に粉砕してしまったものであるが、14とほぼ同形態の鈴具と考えられる。現存する枠頭部は円環形であり、刺金の先端部が残存する。枠部断面は幅約７㎜のいびつな方形である。復元残存長3.6㎝、最大幅4.5㎝。残存重量9.5ｇを測る。

3．第３次副葬（第10図、図版９・10）

出土はいずれも須恵器である。**図**11を除くといずれも墳丘表土、流土からの出土であるが、墳頂部における最終的な副葬（第３次副葬）遺物としてここでは一括して報告する。

１・３は壺蓋。１は強く丸みを帯びた天井部を有し、天井部と口縁部は鈍い稜によって区画される。口縁端部内面には微弱な段が形成されている。３は１に比して天井部の丸みは弱い。天井部と口縁部の境界に段および凹線は形成されておらず、なだらかに移行している。口縁端部内面には微弱な段が形成されている。天井部外面ヘラ削り時のロクロ回転は右回り。

２・４は短頸壺。２はやや肩の張る体部、短く内傾する口縁を有する。口縁端部は丸く収める。底部を欠失しているが、体部外面にはカキ目調整、底部付近は回転ヘラ削りが行われている。ロクロ回転右。４は平底に近い底部を有する。体部は椀形に開いた後に腹部から内傾して頸部に至り、短く直立する口縁を形成する。口縁端部は丸く収める。底部外面には回転ヘラ削りが行われる。ロクロ回転右。

５～８は蓋杯。５は平坦な天井部を有する杯蓋で、口径は15.8cmと大きい。天井部と口縁部は強い凹線によって区画される。器高に対して口縁高が高い。７は丸みを帯びた天井部を有する杯蓋であり、口径は16.2cmと大きい。天井部と口縁部は鈍い凹線気味の鈍い段で区画される。口縁端部内面には微弱な段が形成されている。５・７共に天井部外面のヘラ削り時のロクロ回転は右。６はやや平底状を呈する杯身。短く内傾する口縁を有しており、口縁端部は丸く収める。８は丸みを帯びた底部を有する杯身。６と同様に短く内傾する口縁部を有するが、端部内面には微弱な段が形成されている。底部外面中央にはゲタ痕が残る。６・８共に底部外面ヘラ削り時のロクロ回転は右。

９は器台。土師質焼成であるが、胎土の性質から見て須恵器の焼成不良品と考えられる。脚部は現状で４段までが確認できるが、脚裾部は欠失している。上から３段までは長方形スカシが５方向に穿たれているが、４段目は僅かに残るスカシ上面の形態から長方形にはならないものと考えられる。各段には櫛状工具による縦位の刺突が施されている。杯部は口径に対して体部が浅い形態である。外面口縁下には微弱な凹線で区画された文様帯に波状文を１帯ずつ施文している。

10は無蓋高杯の杯口縁部片。杯底部と口縁部は段を形成することにより区画されている。体部外面には櫛状工具による刺突文が施されている。

11は**図**。丸底球形の体部を有しており、やや太頸の外傾する頸部から段を形成して口縁部に至る形態である。口縁部は上外方に短く広がっている。体部の横方向にカキ目を施す部分に注口を設けている。外面体部下半から底部にかけては回転ヘラ削りを行った後不定方向のカキ目、さらにナデ調整を行っている。

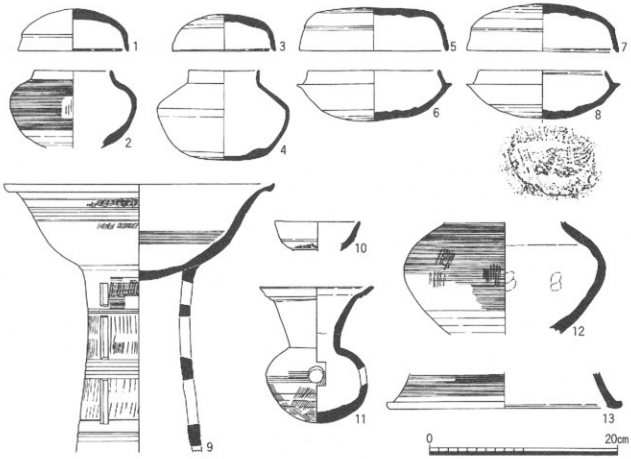
12は壺の体部片。大きく腹部の張る算盤球形の体部であり、体部下半から底部にかけては回転ヘラ削りが、上半はカキ目が行われる。カキ目下には縦方向の平行叩きが認められる。ヘラ削り時のロクロ回転は右。

13は脚台片と思われる。脚端部は外側で接地する。外面はカキ目が行われる。

以上が第３次副葬と考えられる遺物であるが、１～４の壺蓋、短頸壺は２組のセット関係を、５～８の蓋杯は２組のセット関係を有しているものと考えられる。

4．墓壙埋納祭祀遺物（第11図、図版７・10）

第Ⅲ章２の埋葬施設で記述したように、墓壙内埋土からは須恵器片が多く出土している。遺物の

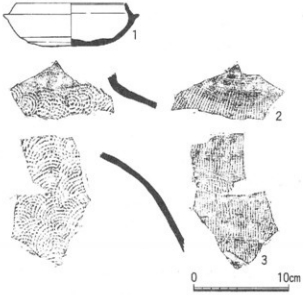


第10図　第３次副葬遺物（土器S=1/4、拓本S=1/2）

整理作業においてこれらの器種、個体数を確認したところ、甕体部１点、杯身１点、杯蓋１点、短頸壺１点が存在することが確認された。これらの破片は、墓壙内全域から高低かかわらず出土していること、存在する器種・個体が限定されることから、意識的に粉砕して埋土に混入させたものと考えられる。接合資料には墳丘表土、流土から出土したものが含まれるが、これは盗掘を受けた際に流出したものか、本来墳丘上面に散布されたものかは不明である。

杯身１は平底状の底部を有しており、短く内傾する口縁部を形成し、端部は丸く収める。底部外面ヘラ削り時のロクロ回転は右。

２・３は大型の甕。２は頸部付近の破片、３は体部の破片である。体部外面は縦方向の平行叩き後部分的にカキ目、内面には同心円の当て具痕が見られる。頸部付近は内外面共にナデ調整が行われる。この甕に関しては、同一個体と考えられる破片が50点以上出土しているにもかかわらず、頸部から口縁、また底部に該当する破片は出土していない。存在しないことを断定できる状況ではないが、祭祀行為に関わる問題であるため報告しておく。



第11図　墓壙埋納祭祀遺物（S=1/4）

この他に、杯蓋天井部と口縁部の小片が出土している。器形の復元は不可能であるが、口縁端部内面は内傾しており、僅かではあるが凹線が残存している。また、短頸壺は体部から口縁部の破片が出土している。これも器形の復元は不可能であるが、体部はやや肩の張る器形であり、腹部径は14cm弱になるものと思われる。口縁は短く内傾する。体部外面はカキ目が行われる。第10図２の短頸壺と同様の形態になるものであろう。

５．その他の遺物（第12図、図版10）

この他に、墳丘表土から弥生時代後期に該当する甕の底部が１点出土している。薄手の平底であり、体部外面には横方向の叩きが僅かに観察できる。内面は細い原体によるハケ調整が行われる。生駒西麓産の胎土であり、外面は暗褐色（10YR3/3）、内面は灰黄褐色（10YR4/2）を呈する。

第12図　その他の遺物（S=1/4）

以上、今回の調査で出土した遺物の報告を行った。須恵器の特徴としては、外面の回転ヘラ削り時のロクロ回転がすべて右回りであること、また蓋杯内面に同心円スタンプが見られることが挙げられる。遺物の所属時期に関しては、須恵器蓋杯、鼎の特徴からＭＴ15～ＴＫ10の古相に該当する資料と言える。

第Ⅴ章　まとめ

甘山南古墳は埋葬施設が未盗掘であったため、古墳築造当時の被葬者埋葬状況、埋葬風習を復元する上で良好な資料を得ることができた。ここでは甘山南古墳の特徴を列記することでまとめに代えておく。

①墳丘の形状・規模

墳丘は、約22mの円墳と考えられる。墳丘の大部分は自然地形を利用した地山の削り出しで成形されているが、平地部から死角になる部分の尾根、谷地形は整形せずに終えている。また、墳丘北側裾部に堆積する土質から、部分的に盛土が行われていたようである。墳丘の高さは、裾部から現存する封土までで約2.4mである。墳丘を区画する周溝、墳丘の段築、葺石など外部施設は存在しない。

②埋葬施設

木棺直葬を内部主体とする。墓壙は地山を掘り込んだものであり、掘方で5.7m×3.3mの平面長方形、床面は5.2m×3.0mの長方形である。深さは約1.2mである。墓壙北東長壁側には段状の施設が設けられている。これは、棺を墓壙内に搬入するための施設と考えられる。

③木棺

墓壙床面の北西側には木棺の痕跡として粘土塊、棒状痕跡が残っていた。粘土塊は木棺木口片側にのみ存在する。棒状痕跡は墓壙主軸に直交する形で南西側、北東側に残っていた。地山に断面「U」字形に陥入する痕跡であり、周縁に赤色顔料が残存する部分が確認された。釘・鋲など鉄製の木棺結合部材は出土していないため、底板、側板、天井板が「小穴入れ」「ちきり留め」または「蟻仕掛け」など何らかの方法で組み合わされていたものと考えられる。

また、木棺痕跡部分の床面は南西から北東方向に下がっている。

④埋葬風習と副葬品

副葬は、1．棺内、2．墓壙埋め戻し途中、3．墓壙埋め戻し終了後の墳頂部と少なくとも3回行われている。本報告ではそれぞれを第1次副葬～第3次副葬と名付けた。

第1次副葬は、鉄器類（鏃3、大刀1、刀子1）、金属器（耳環1）、玉類（碧玉製管玉14、琥珀製棗玉15、ガラス小玉4、ガラス製？連球）、土器類（須恵器壺1、土師器壺1）、朱で構成される。第2次副葬は、鉄器類（鉸具2）、土器類（須恵器杯蓋6、杯身6、壺1）で構成される。第3次副葬はすべて須恵器である。現状で、杯蓋2、杯身2、壺蓋2、短頸壺2、器台1、高杯1、鐙1、壺1、脚台1が確認されている。

配置に関しては、第1次副葬は木棺痕跡の南西側木口、棺中央部に集中している。この配置は第2次副葬にまで引き継がれる。副葬品の配置から南西頭位に復元される。

この他に、墓壙埋土内から須恵器の破片が多数出土している。器種、個体数に関しては、甕1、杯蓋1、杯身1、短頸壺1である。いずれもかなりの小片であること、器種、個体が限られていること、墓壙埋土には墓壙掘削土がそのまま利用されていると考えられることなどから、これらは埋葬風習に関わる祭祀行為と考えられる。

⑤所属時期

出土した須恵器は、古墳時代後期前半、須恵器型式でＭＴ15からＴＫ10古相の特徴を有している。本市では石川西岸、羽曳野丘陵上でのこの時期の古墳の確認は初例となる。

以上が廿山南古墳の概要である。古墳時代後期前半の墳墓に関しては、石川東岸には一須賀古墳群、寛弘寺古墳群などが大きく展開していることに比して、石川西岸では不明瞭な状況であった。今回の調査は、その空白部分の一端を埋め得る資料を得ることができた。しかしながら、廿山南古墳と非常に強い類似性を有する新沢千塚古墳群との関連など、検討課題も多く残っている。遺物に関しては鉄器類、玉類など検討が不十分なものがあり、また遺構に関しても木棺の構造復元等に問題を残す。さらなる資料の増加を期待しつつ、今後の課題としたい。

出土土器観察表

器　種	挿図No.	副葬位置	法量（cm）	特　　徴	備　　考
須恵器 脚付 有蓋壺	8－1	第3次副葬	器高　29.6 脚部高8.5 口径8.7 腹部径16.8	受け部下に波状文を1帯廻らせる。蓋体部上半に凹線を1条廻らせ、その下に櫛による刺突文を縦方向（斜め右上がり）に施す。体部にはカキ目調整が行われるが、腹部から下半にかけて叩きが残る。底部外面には同心円スタンプが施される。台部には長方形スカシが3方向に施される。脚柱部外面はカキ目調整が行われる。	色調　外面　灰色N6 内面　内面N3 焼成　良好 胎土　密
土師器 壺	8－2	〃	器高15.9 口径9.6 腹部径18.0	丸底の底部に腹部の張る体部を有する。直立する頸部からやや内湾気味に開く口縁で、端部は上方に僅かに拡張させる。粘土紐の巻き上げ痕が明瞭に観察できる。	色調　外面　橙色 5YR7/6 内面　にぶい 橙色　5YR7/4 焼成　やや不良 胎土　やや粗
須恵器 杯蓋	9－1	第2次副葬 セット1	器高4.3 口径14.4 稜高1.9	天井部と口縁部は凹線によって区画される。口縁端部内面には凹線化した微弱な段が形成される。天井部外面のヘラ削りは2/3。ロクロ回転右。	色調　内外面　灰色 N7 焼成　良好 胎土　密
須恵器 杯身	9－2	〃 セット1	器高4.5 口縁部高1.4 口径12.9 受け部径 15.5	内傾する口縁部を有し、端部を丸く収める。ほぼ平底の底部であり、外面のヘラ削りは2/3。ロクロ回転右。	色調　外面　灰色N6 内面　灰色N7 焼成　良好 胎土　密
須恵器 杯蓋	9－3	〃 セット2	器高4.5 口径14.8 稜高1.8	天井部と口縁部は凹線によって区画される。口縁端部は丸く収める。天井部のヘラ削りは2/3。ロクロ回転右。	色調　外面　灰色N6 内面　灰色N7 焼成　良好 胎土　密
須恵器 杯身	9－4	〃 セット2	器高4.9 口縁部高1.5 口径13.9 受け部径 16.5	内傾する口縁部を有し、口縁端部は丸く収める。底部はひずみが大きく安定しない。底部外面ヘラ削りは4/5。ロクロ回転右。	色調　外面　灰色N6 内面　灰色N5 焼成　良好 胎土　密
須恵器 杯蓋	9－5	〃 セット3	器高4.5 口径14.4 稜高1.8	丸い天井部を有し、口縁との境界部は凹線によって区画される。口縁端部内面には微弱な沈線が施される。天井部のヘラ削りは4/5。ロクロ回転右。	色調　外面　青灰色 10BG6/1 内面　灰色N5 焼成　良好 胎土　密

器　種	挿図No.	副葬位置	法量（cm）	特　　徴	備　　考
須恵器 杯身	9－6	第2次副葬 セット3	器高4.8 口縁部高1.1 口径12.5 受け部径 15.0	強く内傾する口縁部を有し、端部を丸く収める。丸みを帯びた底部外面のヘラ削りは2/3に及ぶ。ロクロ回転右。	色調　外面　灰色N6 内面　内面N5 焼成　良好 胎土　密
須恵器 杯蓋	9－7	〃 セット4	器高4.6 口径14.2 稜高1.7	天井部と口縁部は凹線によって区画される。口縁端部内面には微別な段が形成される。天井部内面中央には同心円スタンプが残る。天井部外面のヘラ削りは2/3に及ぶ。ロクロ回転右。	色調　外面　灰色N7 内面　灰色N6 焼成　良好 胎土　密
須恵器 杯身	9－8	〃 セット4	器高4.7 口縁部高1.4 口径12.3 受け部径 15.2	内傾する口縁部を有し、端部は丸く収める。やや丸みを帯びた底部であり、外面のヘラ削りは2/3に及ぶ。ロクロ回転右。	色調　外面　灰色N6 内面　灰色N7 焼成　良好 胎土　密
須恵器 杯蓋	9－9	〃 セット5	器高4.4 口径15.7 稜高2.1	偏平な器形であり、天井部と口縁部は凹線によって区画される。口縁端部は丸く収める。天井部外面のヘラ削りは4/5に及ぶ。ロクロ回転右。	色調　外面　灰色N7 内面　灰色N7 焼成　良好 胎土密
須恵器 杯身	9－10	〃 セット5	器高5.1 口縁部高1.0 口径12.7 受け部径 15.4	内傾して短く立ち上がる口縁部を有し、口縁端部は丸く収める。底部は丸みを帯びており、底部内面には同心円スタンプが残る。外面のヘラ削りは2/3に及ぶ。ロクロ回転右。	色調　外面　灰色N7 内面　灰色N6 焼成　良好 胎土密
須恵器 杯身	9－11	〃 セット6	器高4.8 口縁部高1.1 口径12.5 受け部径 15.2	内傾して短く立ち上がる口縁部を有し、口縁端部は丸く収める。やや丸みを帯びた底部であり、外面のヘラ削りは2/3に及ぶ。ロクロ回転右。	色調　外面　灰色N6 内面　灰色N5 焼成　良好 胎土　密
須恵器 杯蓋	9－12	〃	器高4.5 口径14.6 稜高1.8	ひずみが大きくやや丸みを帯びた天井部を有する。天井部内面中央には同心円のスタンプが残る。天井部と口縁部は凹線によって区画される。口縁端部は丸く収められるが、内面に僅かに沈線が残る。底部外面ヘラ削りは4/5に及ぶ。ロクロ回転右。	色調　外面　灰色N6 内面　灰色N5 焼成　良好 胎土　密

器　種	挿図No.	副葬位置	法量（cm）	特　　徴	備　　考
須恵器 壺	9－13	第2次副葬	器高14.9 口径12.7 腹径16.9	丸底に球形の体部を有し、頸部は緩やかに外反する。口縁端部は外方に短く屈曲させて端部は丸く収める。底部から体部下半にかけて外面はヘラ削り、他はナデ調整。内外面に自然釉が付着している。ロクロ回転右。底部には杯身口縁が熔着しており、口縁を打ち欠いている。体部上半には甕の腹部と思われる器壁が熔着している。また、壺の口縁の一部が打ち欠かれているが、これは熔着した甕腹部を打ち欠いた痕跡と思われる。	色調　外面　灰色N6 　　内面　黒色N2 焼成　良好 胎土　密
須恵器 壺蓋	10－1	第3次副葬	器高（4.45） 口径（11.7） 稜高1.8	丸みを帯びた天井部であり、天井部と口縁部は鈍い段によって区画される。口縁はやや外方に開いており、端部内面には微弱な段が形成されている。天井部外面はヘラ削りが行われているが、自然釉が付着しているため削りの範囲が不明瞭である。	色調　外面　暗灰色 　　N3 　　内面　灰色N4 焼成　良好 胎土　密
須恵器 有蓋 短頸壺	10－2	〃	残高8.2 口径8.0 腹部径13.3	口縁部が内傾する短頸壺。口縁端部は丸く収める。やや肩の張る体部を有するが、底部は欠失している。底部は回転ヘラ削り。体部にはカキ目調整。ロクロ回転右。体部には縦方向の直線文3本のヘラ記号が施されている。	色調　内外面　灰色 　　N6 焼成　良好 胎土　密
須恵器 壺蓋	10－3	〃	器高3.8 口径10.9	やや丸みを帯びた天井部から不明瞭な境界部を経てやや外開きの口縁部に至る。口縁端部内面には微弱な段が形成される。天井部外面のヘラ削りは4/5に及ぶ。ロクロ回転右。	色調　外面　灰色N4 　　内面　灰色N5 焼成　良好 胎土密
須恵器 有蓋 短頸壺	10－4	〃	器高9.5 口径7.4 腹部径14.0	直立する口縁部を有し、口縁端部は丸く収める。体部は大きく肩の張る形態であり、平底に近い底部を有する。底部回転外面ヘラ削り調整。ロクロ回転右。	色調　外面　灰色N4 　　内面　灰色N7 焼成　良好 胎土密
須恵器 杯蓋	10－5	〃	器高4.5 口径15.8 稜高2.6	平坦な天井部を有し、天井部と口縁部は凹線によって区画される。口縁端部は丸く収める。天井部外面ヘラ削りは4/5に及ぶ。ロクロ回転右。	色調　内外面　灰色 　　N6 焼成　良好 胎土　密
須恵器 杯身	10－6	〃	器高5.4 口縁部高1.4 口径13.9 受け部径 16.5	内傾する口縁部を有し、口縁端部は丸く収める。やや丸みを帯びた底部であり、外面のヘラ削りは2/3に及ぶ。ロクロ回転右。	色調　内外面　灰色 　　N5 焼成　良好 胎土　密

器種	挿図No.	調査位置	法量（cm）	特徴	備考
須恵器 杯蓋	10－7	第3次調査	器高5.0 口径16.2 稜高2.4	やや丸みを帯びた天井部を有し、天井部と口縁部は凹線気味の鈍い段で区分される。口縁端部内面には不明瞭な段が形成される。天井部外面ヘラ削りは4/5に及ぶ。ロクロ回転右。	色調　外面　青灰色 5PB5/1 内面　灰色N5 焼成　良好 胎土　密
須恵器 杯身	10－8	〃	器高5.1 口縁部高1.3 口径13.3 受け部径 16.4	内傾する口縁部を有し、口縁端部内面に微弱な段を形成する。やや丸みを帯びた底部の外面ヘラ削りは4/5に及ぶ。ロクロ回転右。底部外面中央にロクロゲタ痕跡が残る。	色調　外面　灰色N6 内面　灰色N5 焼成　良好 胎土　密
須恵器 器台	10－9	〃	残高19.4 杯部高10.2 口径28.85 残存脚部 最大径13.4	土師質の器台であるが、須恵器の焼成不良品である。杯部は外方に大きく開く器形であり、口縁端部を水平に屈曲させた後、斜め上方に拡張させている。外面には微弱な凹線で区画された文様帯に2帯の波状文を施す。内面は一部カキ目調整が行われる。脚部は現状で4段が残存する。上から3段までは長方形のスカシが5方向に穿たれているが、4段目はスカシ残存部の形態から長方形にはならないようである。上から3段目までは櫛状工具による縦方向の刺突文が施され、最上段はカキ目調整が行われる。	色調　外面　橙色 5YR6/6 内面　にぶい橙色 5YR6/4 焼成　不良 胎土　密
須恵器 無蓋高杯	10－10	〃	残高3.05 口径（9.0）	杯部片であり、杯底部と口縁部は段によって区画される。杯底部外面には櫛状工具による縦方向の刺突文が施される。	色調　外面　灰色N4 内面　灰色N6 焼成　良好 胎土　密
須恵器 **甕**	10－11	〃	器高14.5 頸部高6.4 口径11.95 腹部径10.8	丸底の底部を有し、球形の体部のやや上方に注口を穿つ。頸部はゆるやかに外反し、段及び凹線で口縁部と区画する。口縁は外方に短く開く。端部は丸く収める。体部外面注口付近は横方向のカキ目調整。体部下半から底部にかけては回転ヘラ削り後不定方向のカキ目を施しナデ消している。	色調　外面　灰色 5Y5/1 内面　灰色 5Y6/1 焼成　良好 胎土　密
須恵器 壺	10－12	〃	残高11.95 頸部径 （12.8） 腹部径 （21.4）	大きく腹部の張る壺体部片。頸部以上と底部を欠失している。底部付近は回転ヘラ削り、体部はカキ目調整が行われるが、カキ目下に部分的に縦方向の平行叩き痕が残る。削り時のロクロ回転右。	色調　外面　灰色N4 内面　紫灰色 5P5/1 焼成　良好 胎土　密

器　種	挿図No.	副葬位置	法量（cm）	特　徴	備　考
須恵器 脚台	10－13	第3次副葬	残高3.9 脚部径 (25.0)	器種不明であるが、脚台の裾部と考えられる。脚端部は外側で接地する形態である。外面はカキ目調整が行われる。	色調　外面　灰色N4 内面　灰色N5 焼成　良好 胎土　密
須恵器 杯身	11－1	墓壙埋納 祭祀遺物	器高4.9 口縁部高1.3 口径12.6 受け部径 15.6	内傾して立ち上がる口縁部を有し、口縁端部は丸く収める。平底気味の底部の外面ヘラ削りは4/5に及ぶ。ロクロ回転右。	色調　内外面　灰色 N6 焼成　良好 胎土　密
須恵器 壺	11－2 3	〃		頸部下から体部にかけての破片。外面は縦方向の平行叩き後、部分的にカキ目調整を行う。内面には同心円当て具痕が明瞭に残る。	色調　外面　灰色N6 内面　青灰色 5PB6/1 焼成　良好 胎土　密

管玉計測表

NO	全長（mm）	直径（mm）	孔径（大）（mm）	孔径（小）（mm）	重量（g）
1	20	6	3	1	1.1
2	17.5	6	2.5	1	0.8
3	16	6	2	1	0.9
4	23	6	3	0.8	1.2
5	21	6.5	3	1	1.1
6	19	6	2.5	1	1.0
7	25.5	6.3	3	0.7	1.5
8	18	5.8	3	1	0.9
9	19.5	6	3.5	1	0.9
10	16	5.7	3	1	0.7
11	20	5.8	3	1	0.9
12	17	5.9	2.5	1	0.8
13	17.5	6	2.5	1	0.9
14	18	6	2.5	1	0.9

棗玉計測表

NO	全長（mm）	最大幅（mm）	孔径（mm）	重量（g）
1	16	14.5	3.2・3.0	1.7
2	17	15	3.2・3.0	1.8
3	19	14	3.8・2.5	2.1
4	17	13.5	2.5・2.0	1.4
5	24	15	3.0・3.3	2.45
6	14	13	3.2・3.0	1.3
7	21.5	16.5	2.4・2.8	2.6
8	17.5	15	3.2・3.5	2.3
9	19	15	3.0・2.5	2.5
10	21	16.5	2.8・2.5	3.1
11	20	15	3.0・2.7	2.2
12	16.5	12.5	2.8・2.8	1.4
13	13	12.5	3.0・3.0	1.1
14	15	13	2.9・3.0	1.3
15	（8）	（0.9）	不明	0.2

付編　科学的分析

1．鉄製大刀付着木質部の同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

廿山南古墳から出土した鉄製大刀には、僅かであるが木質部が付着していた。この木質部は、大刀の切先付近の鞘の木材とされている。鉄分が組織に沈着して、かろうじて原形を保っている状態であった。本報告では、木材利用に関する資料蓄積のために、木質部の樹種同定を試みる。

1．試料

試料は、鉄製大刀に付着していた木質部（大刀の切先付近の鞘の木材）である。

2．方法

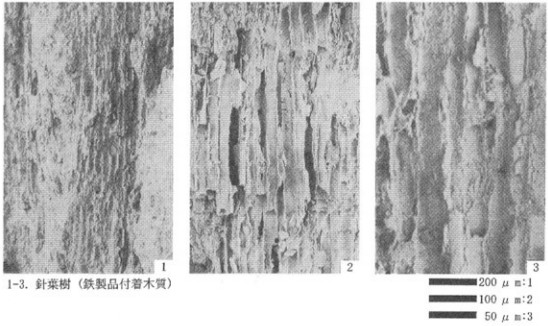
木質部の破壊を避けるため、鉄製品に付着した状態で、実体顕微鏡および走査電子顕微鏡による観察を行う。電子顕微鏡観察では、試料台に木質部が上になるように電導テープで固定し、無蒸着・低真空での観察を行う。

3．結果

木質部は板目面が上部となる。木口面・柾目面の観察はできなかった。観察した範囲では、仮道管を主とし、道管要素は認められない。仮道管内壁には、有縁壁孔が１列で配列する。放射組織は、単列、１～５細胞高前後。

以上の特徴から、針葉樹に同定される。日本産針葉樹は、マツ科（６属24種）、スギ科（１属１種）、コウヤマキ科（１属１種）、ヒノキ科（４属９種）、マキ科（１属２種）、イヌガヤ科（１属１種）、イチイ科（２属）がある。しかし、今回の試料は、針葉樹材の同定に必要な分野壁孔の形態や樹脂細胞・樹脂道の有無等が観察できないため、種類については不明である。

図版１　木材



1-3. 針葉樹（鉄製品付着木質）

2．耳環の成分分析

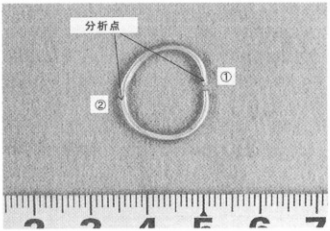
住友金属テクノロジー株式会社

1．目的

金製装身具金含有量の半定量分析を行う。

2．供試体

写真１に供試体の外観を示す。



3．調査内容

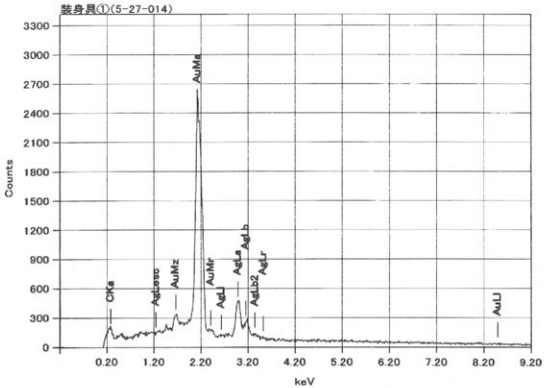
ＥＤＸ半定量分析

装置　　エネルギー分散型Ｘ線分析装置

日本電子製ＪＥＤ－２２００型

4．試験結果

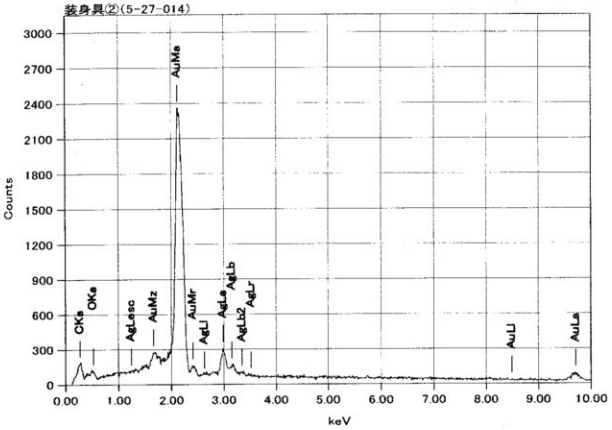
図１－１、１－２に試験結果を示す。



ＺＡＦ法簡易定量分析

元素	(keV)	質量%	誤差%	原子数%	化合物	質量%	K
C K	0.277	5.02	0.04	43.02			2.2299
Ag L	2.983	17.09	0.15	16.30			15.3207
Au M	2.121	77.89	0.14	40.68			82.4494
合計		100.00		100.00			

図１－１　EDX分析結果



ＺＡＦ法簡易定量分析

元素	(keV)	質量%	誤差%	原子数%	化合物	質量%	K
C K	0.277	8.21	0.04	51.19			3.4645
O K	0.525	2.49	0.09	11.64			2.0715
Ag L	2.983	10.32	0.14	7.16			9.2673
Au M	2.121	78.98	0.13	30.01			85.1967
合計		100.00		100.00			

図１－１　EDX分析結果

3．赤色顔料の成分分析

ジオクロノロジージャパン株式会社
理学博士　大四　雅弘

岩石化学分析２試料(註)が完了したので、その結果を報告申する。

分析結果

分析結果は、全岩化学分析結果一覧表に示す通りである。

化学分析は、ＩＣＰ－ＯＥＳ（誘導プラズマ発光分析装置、パーキンエルマー社Optima3000）およびＩＣＰ－ＭＳ（誘導結合プラズマ質量分析装置、パーキンエルマー社ELAN6000）で行った。また、Ｈｇ分析はＦＩＭＳ（還元気化水銀原子吸光法とフローインジェクション法の併用分析装置、パーキンエルマー社FIMS400）を使用した。

これらの分析はＩＳＯ１７０２５（ＩＳＯ２５ガイドライン）に適合したカナダ国内のＣＡＮ－Ｐ－１５７９取得施設で行っている。

標準試料の分析結果を含め分析は適切に行われている（標準試料の分析結果は電子媒体に記載）。

分析結果より、ＳｉＯｎ2の含有量はそれぞれ、60.56％、61.14％である。なおＳｎおよびＨｇの含有量はそれぞれ1,000ppm、400ppmと通常の分析可能上限を超える。

【註】試料１は玉類周辺の赤色顔料であり、試料２は墓横床面南西部で検出された赤色顔料である。それぞれ35㎜フィルムケース１箱分の試料を採取し、残りは整理作業時に遺物の採取のため洗浄を行った。

表１．　全岩化学分析結果一覧

Element	At.No.	Units	Detect.Limit	1	2
SiO2		%	0.01	60.56	61.14
TiO2		%	0.01	0.437	0.450
Al2O3		%	0.01	15.47	16.54
Fe2O3		%	0.01	2.78	4.38
MnO		%	0.01	0.023	0.025
MgO		%	0.01	0.55	0.59
CaO		%	0.01	0.91	0.88
Na2O		%	0.01	2.17	2.15
K2O		%	0.01	1.71	1.77
P2O5		%	0.01	0.11	0.05
LOI		%	0.01	12.35	12.00
total		%	0.01	97.07	99.98
Be	4	ppm	1	4	2
Sc	21	ppm	1	8	8
V	23	ppm	5	36	43
Cr	24	ppm	20	34	34
Co	27	ppm	1	8	7
Ni	28	ppm	20	<20	24
Cu	29	ppm	10	52	96
Zn	30	ppm	30	110	295
Ga	31	ppm	1	17	18
Ge	32	ppm	0.5	1.4	1.3
As	33	ppm	5	16	14
Rb	37	ppm	1	60	68
Sr	38	ppm	1	158	159
Y	39	ppm	0.5	16.7	13.1
Zr	40	ppm	1	232	140
Nb	41	ppm	0.5	9.2	6.2
Mo	42	ppm	2	<2	2
Ag	47	ppm	0.5	11.1	2.7
In	49	ppm	0.1	61.3	9.1
Sn	50	ppm	1	>1,000	>1,000
Sb	51	ppm	0.2	5.0	1.7
Cs	55	ppm	0.1	2.9	3.2
Ba	56	ppm	1	421	463
La	57	ppm	0.05	35.21	27.96
Ce	58	ppm	0.01	49.93	42.00
Pr	59	ppm	0.01	6.63	4.81
Nd	60	ppm	0.05	24.00	17.35
Sm	62	ppm	0.01	4.08	2.76
Eu	63	ppm	0.005	1.030	0.796
Gd	64	ppm	0.01	3.85	2.57
Tb	65	ppm	0.01	0.53	0.37
Dy	66	ppm	0.02	2.92	2.12
Ho	67	ppm	0.01	0.59	0.43
Er	68	ppm	0.01	1.69	1.34
Tm	69	ppm	0.005	0.253	0.198
Yb	70	ppm	0.01	1.63	1.22
Lu	71	ppm	0.002	0.249	0.193
Hf	72	ppm	0.1	5.9	3.5
Ta	73	ppm	0.01	0.54	0.54
W	74	ppm	0.5	1.0	1.5
Hg	80	ppm	0.001	>400.000	>400.000
Tl	81	ppm	0.05	0.80	0.65
Pb	82	ppm	5	1,952	414
Bi	83	ppm	0.1	1.2	0.6
Th	90	ppm	0.05	9.90	6.95
U	92	ppm	0.05	1.77	1.43

報告書抄録

ふりがな	つづやまみなみこふん
書名	廿山南古墳
副書名	身体障害者療護施設「梅の里ホーム」建設に伴う緊急発掘調査報告
巻次	
シリーズ名	富田林市遺跡調査会報告
シリーズ番号	22
編著者名	横山　成己
編集機関	富田林市遺跡調査会
所在地	〒584-8511　大阪府富田林市常盤町１番１号　☎0721-25-1000
発行年月日	西暦　2003年３月31日

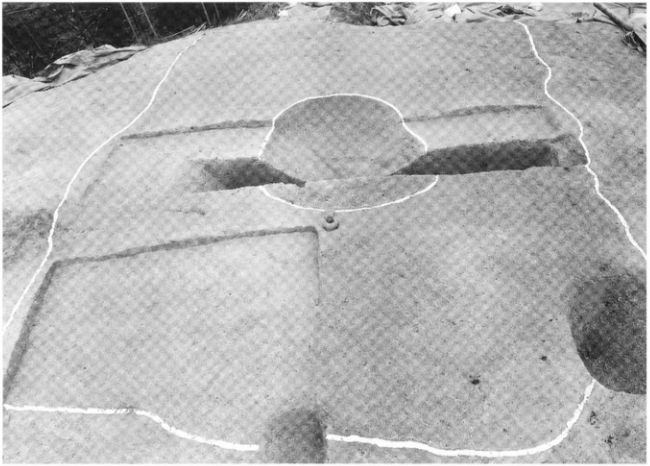
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
廿山南古墳（つづやまみなみこふん）	富田林市（とんだばやしし） 廿山20－８他（つづやま）	27214	172	38° 32′ 30″	168° 09′ 30″	2001.8.20～ 2003.3.31	400	身体障害者療護施設「梅の里ホーム」建設による

所収遺物	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
廿山南古墳	古墳	古墳時代後期	円墳・木棺直葬	須恵器・土師器・ 玉類・鉄器類 金属器・朱	古墳時代後期の未盗掘墳

図　　版

廿山荷古墳全景　上空から

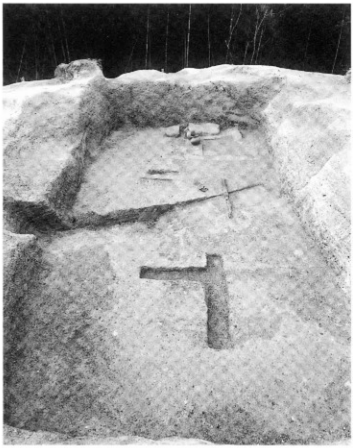
廿山南古墳遠景　南西から



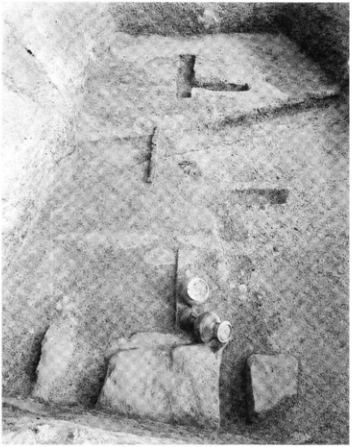
封土検出状況　南から

第2次剛葬須恵器類　北東から

墓壙内埋土土層断面　南東から

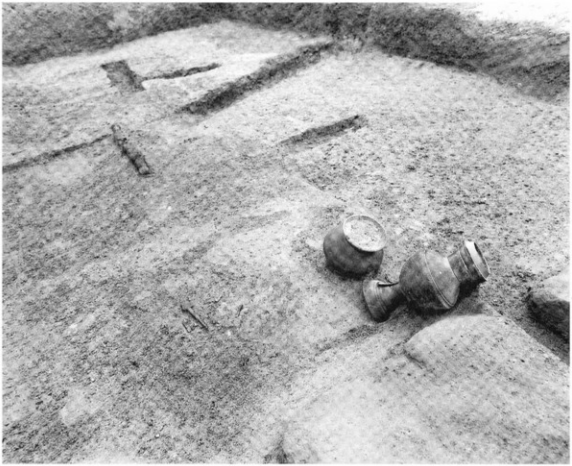


主体部全景　北東から



主体部全景　南西から

廿山南古墳から廿山古墳を望む　南から



墓壙床面検出状況　西から

墓壙床面出土土器類・鉄器類　北から

墓壙床面出土玉類・鉄製大刀　南から

9－12

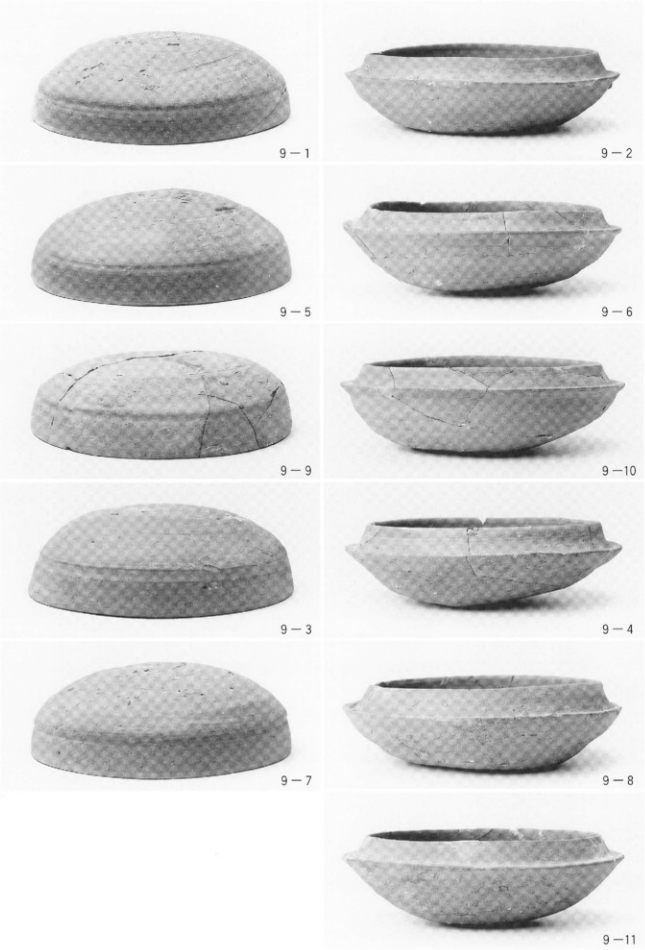
9－13

8－1

8－2

11－1

第１次・２次副葬遺物・墓壙埋納祭祀遺物



第2次副葬遺物

10－7

10－3

10－5

10－1

10－8

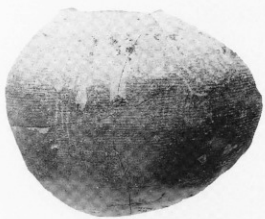
10－6

10－11

10－2

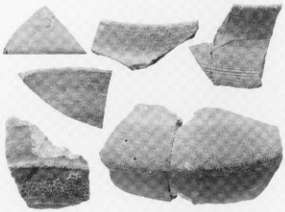
10－4

10－9



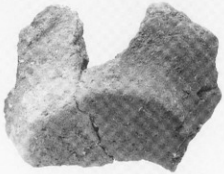
10－12

10－13



10－10

11－2・3



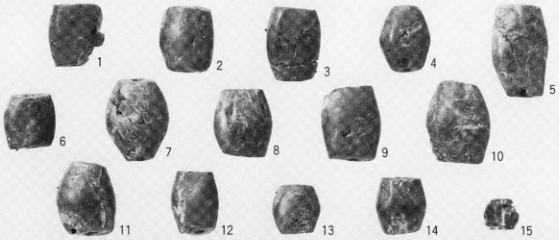
12－1

第3次副葬遺物・藍蔵埋納祭祀遺物・その他の遺物

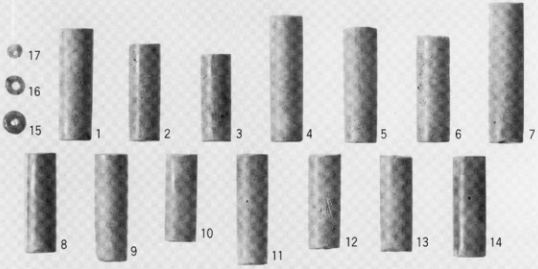
須恵器蓋坏セット

須恵器壷・杯蓋セット

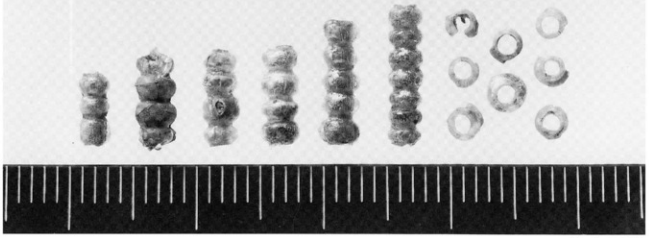
玉類2群



玉類1群



玉類1群ガラス製？連玉



8－1

8－3

9－15

8－2

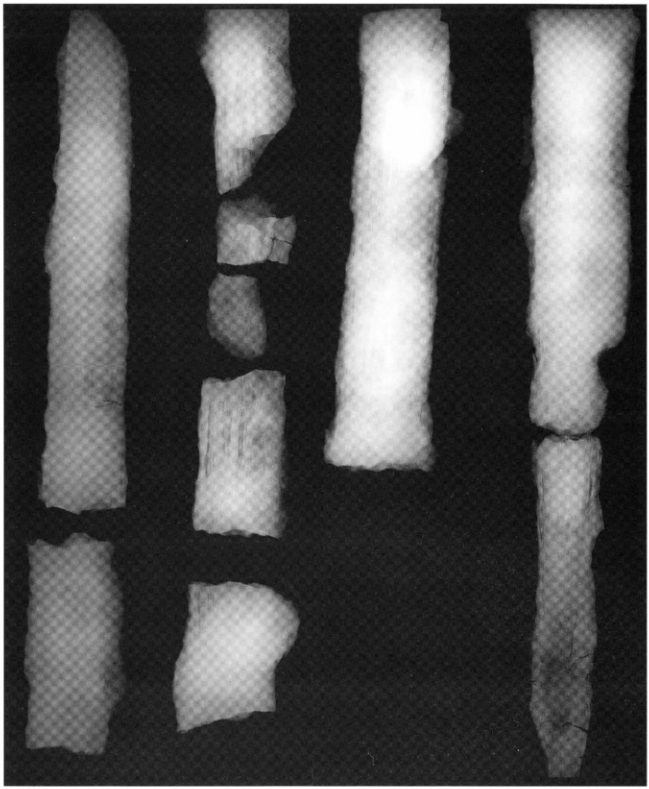
8－1

9－14

8－4

9－5

鉄製大刀



鉄製大刀X線写真

廿山南古墳

発行年月日　2003年３月31日
編集・発行　富田林市遺跡調査会
住　　所　富田林市常盤町１番１号
印　　刷　橋本印刷株式会社

2003．300